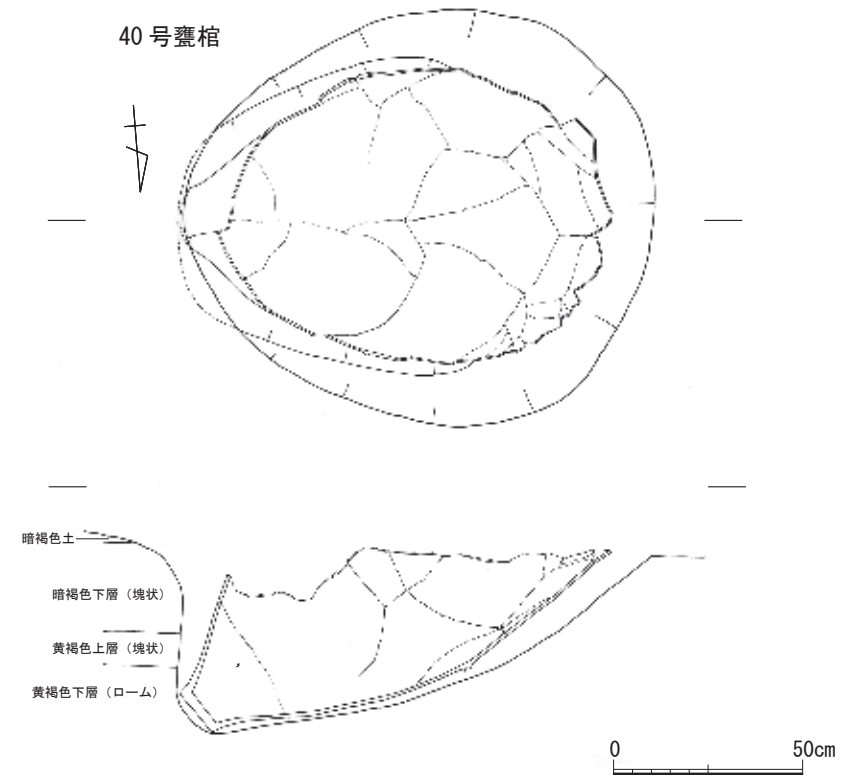
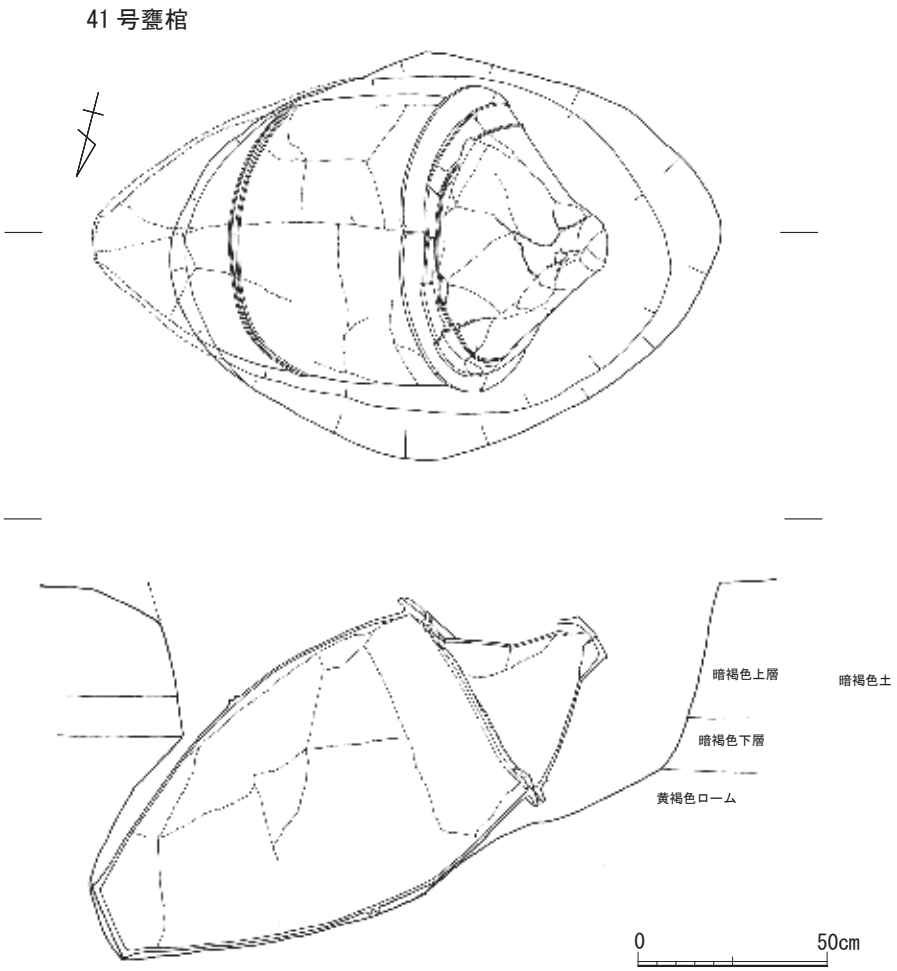
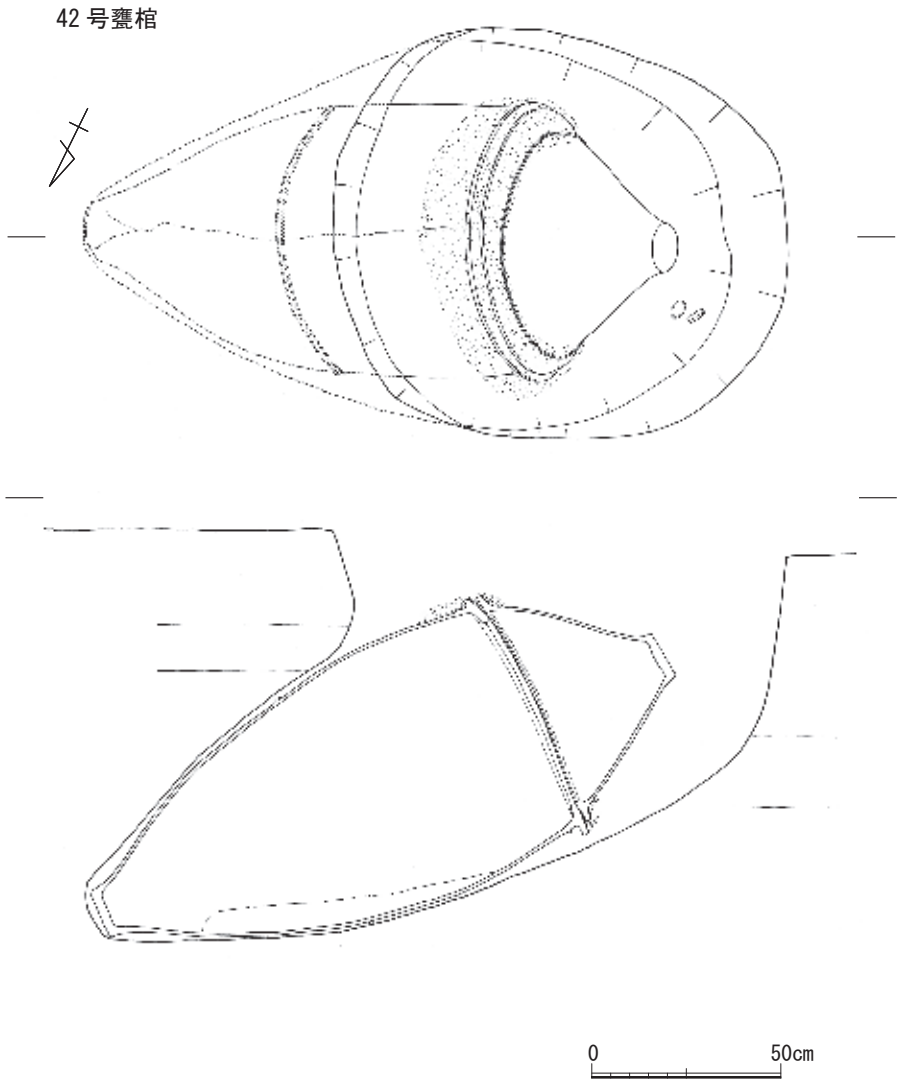




第22図　遺構実測図16（S= 1/20）※土層やレベル数値の記載漏れ及び写植位置等全てS55当時実測図のまま



第23図　遺構実測図17（S＝１/20）※土層やレベル数値の記載漏れ及び写植位置等全てS55当時実測図のまま

がった状態のものもある。

「墓壙」の形状については、円形・楕円形・卵形・隅丸方形などがあり、さらに「二次壙」があるものとないものがある。しかし実際、甕棺検出時には掘り方の上位ほとんどが失われているようなので、残された平面図・断面図から本来の墓壙平面プランや二次壙存在の有無を語ることは難しい。

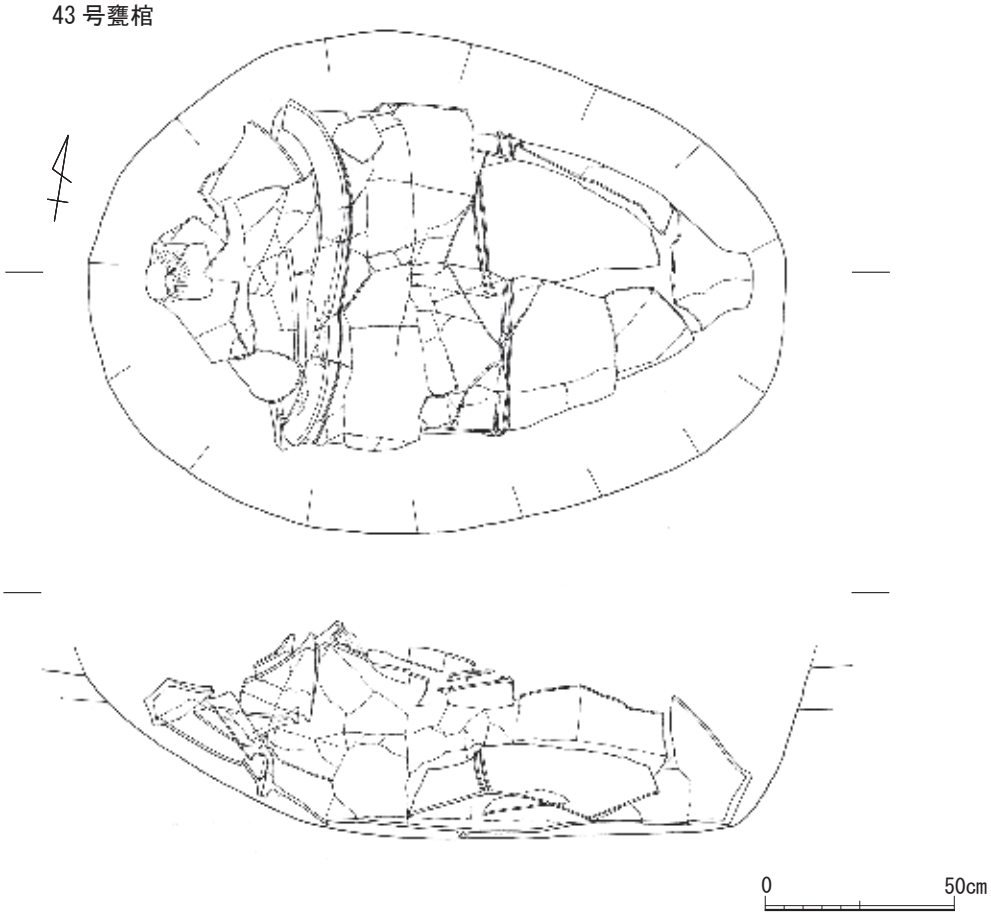
上記の「傾斜」「墓壙形状」「二次壙」などの検証は、当然ながら「単棺」「複棺」それぞれの形状・大きさの違いや蓋の閉じ方によって本来規定されるものと考えられる。すなわち、弥生時代の人々の甕棺埋設の仕方や遺体埋葬の手順などにも関わってくる重要な問題と考えられ、大変興味深い。

次に甕棺墓の標石について。本稿で紹介した遺構検出図のうち９号・20号には、甕棺墓の周囲に石が配された様子が記録されている。特に９号甕棺の平面図では20～40ｃｍ大の礫石が５個記録されている。断面図を見るとちょうど暗褐色土（Ⅱ層）上面に礫石が載っており、弥生時代当時の地表面に並んで配されていた可能性もある。発掘担当者も標石の可能性を意識して、これら礫石を平面図・断面図に記載したものと思われる。

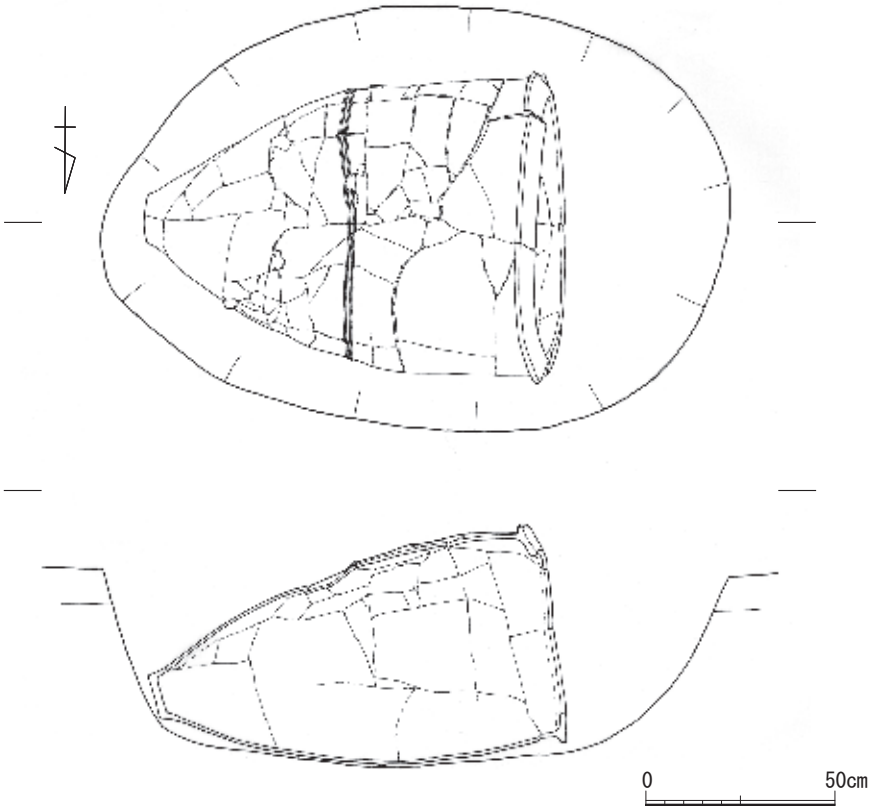
さらに遺構検出図から判別できるその他の情報をまとめると、粘土目張りが残存している甕棺が15・18・21・22・23・28・29・31・32・36・42・43・51号で、特に28号は広範囲に粘土を使用している。また甕棺内の人骨は図面にも記載されておらず、発掘当時もほとんど残存していなかったものと思われるが、17号甕棺のみ「骨粉」の記録がある。

また遺構配置図（第５図）を見ると甕棺墓とは別

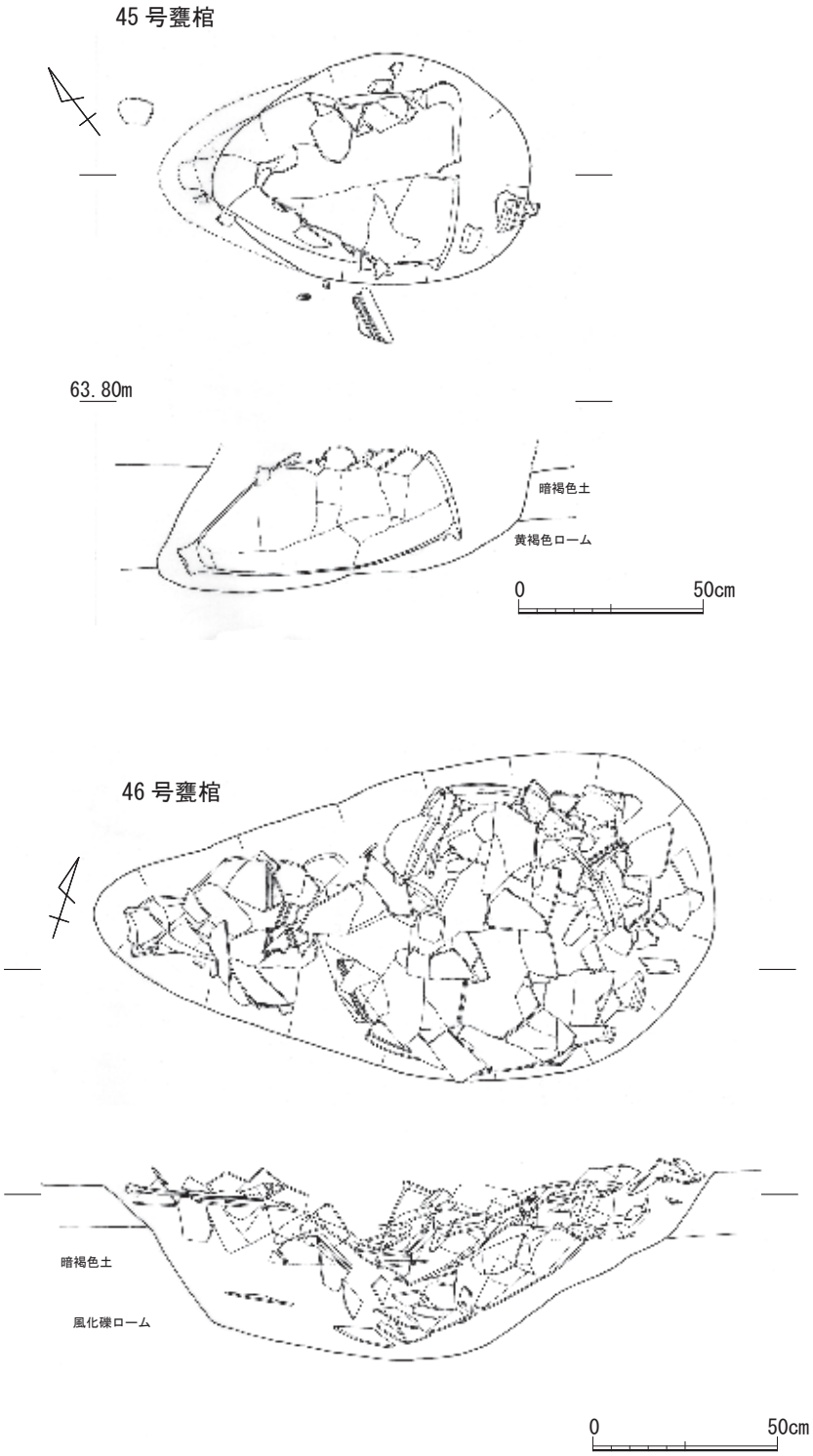
43 号甕棺



44 号甕棺



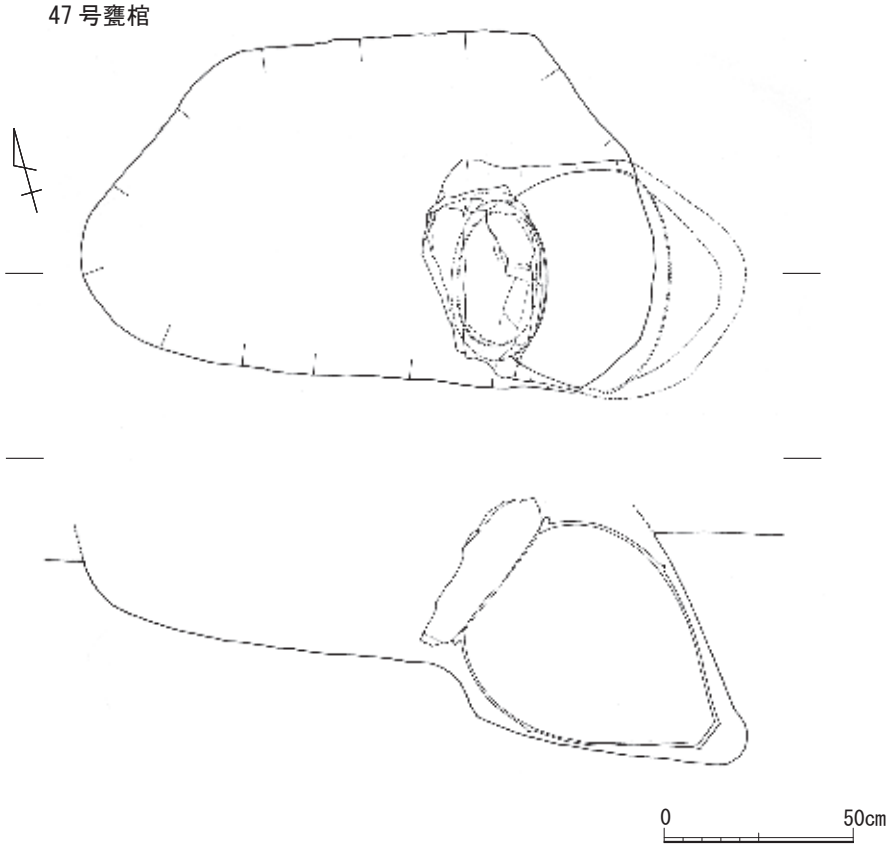
第24図　遺構実測図18（S= 1/20）※土層やレベル数値の記載漏れ及び写植位置等全てS55当時実測図のまま



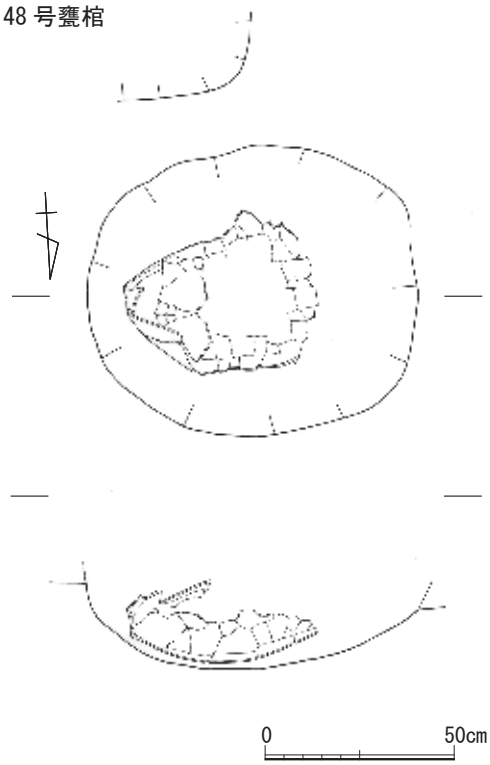
第25図　遺構実測図19（S= 1/20）※土層やレベル数値の記載漏れ及び写植位置等全てS55当時実測図のまま

に、調査区内の各所に「石鏃」「円盤状石器」「打製石斧」「磨製石斧」「鉄片」「土師器高坏」等の遺物出土地点がプロットされているが、こうした甕棺以外の遺物については、今回は整理できていないため掲載していない。したがって次項「2）遺物編」で取り上げるのは、岩倉山中腹遺跡から出土した遺物全般ではなく、甕棺として使用された弥生土器に限られ、前述の「石鏃」「円盤状石器」「打製石斧」「磨製石斧」「鉄片」「土師器高坏」等の掲載はないことをあらかじめお断りしておきたい。

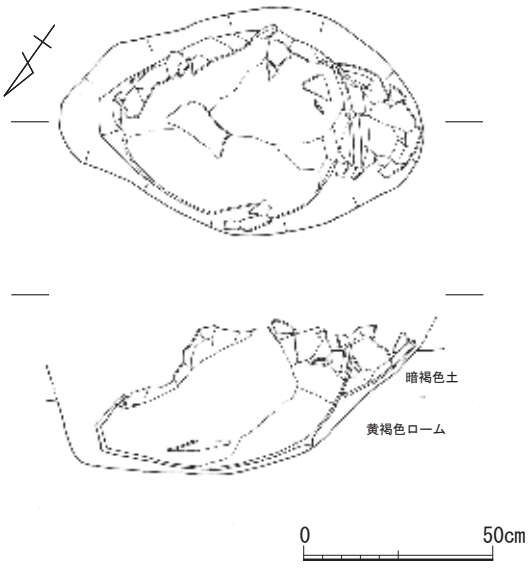
47 号甕棺



48 号甕棺

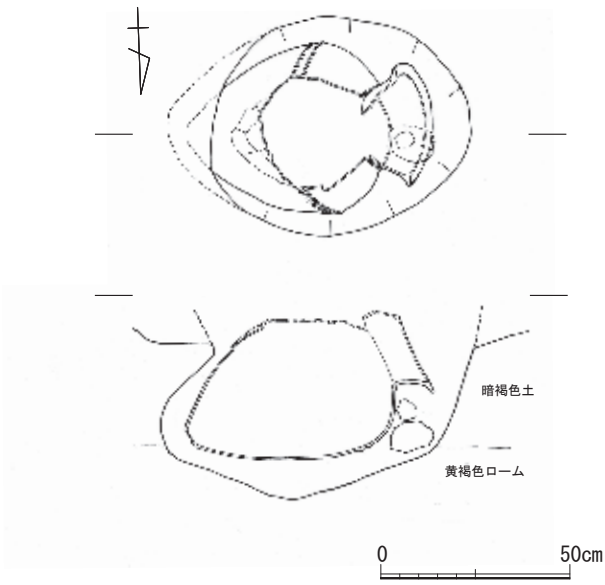


49 号甕棺

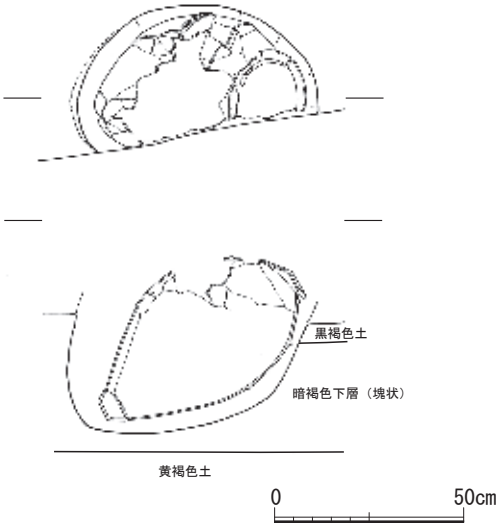


第26図　遺構実測図20（S= 1 /20）※土層やレベル数値の記載漏れ及び写植位置等全て S55当時実測図のまま

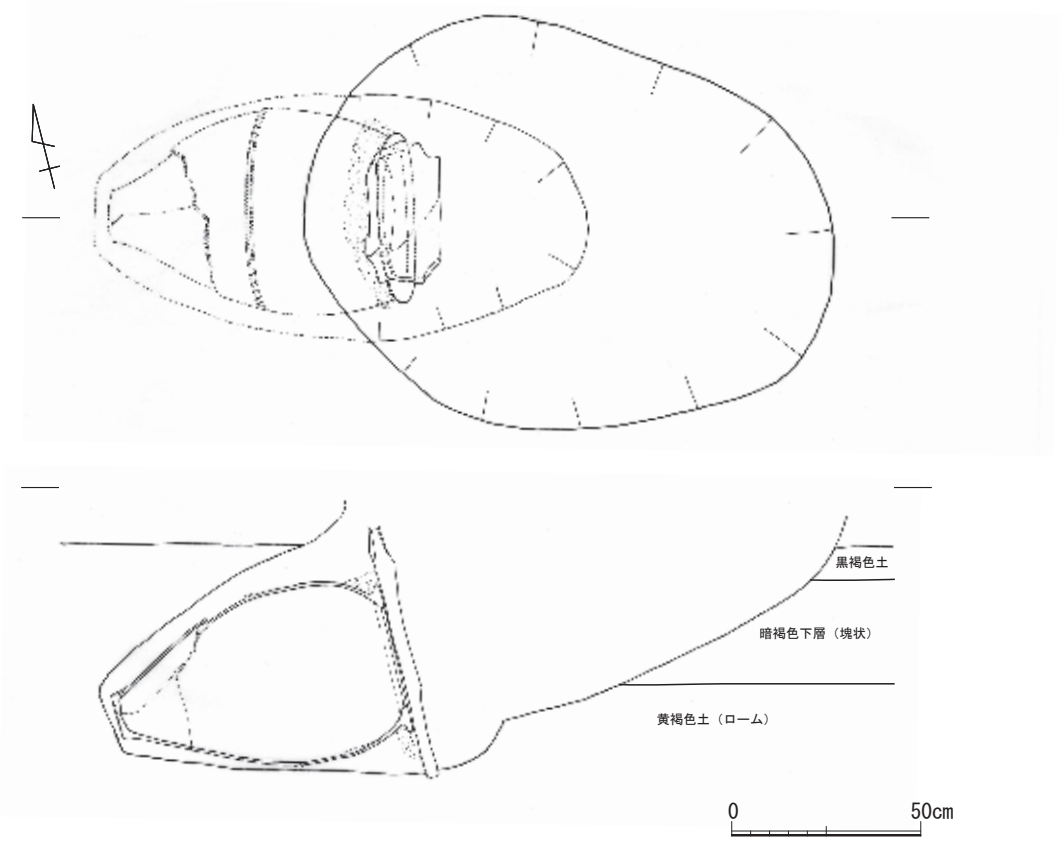
50 号甕棺



52 号甕棺



51 号甕棺



第27図　遺構実測図21（S= 1/20）※土層やレベル数値の記載漏れ及び写植位置等全てS55当時実測図のまま

2）遺物編

岩倉山中腹遺跡の出土遺物としては、甕棺以外にも土器（縄文土器・弥生土器・土師器）や石器等が少量見られ、甕棺と同様、熊本博物館の収蔵庫に保管されている。

当時の遺構配置図（第５図）によれば、「土師器高坏」「打製石斧」・「磨製石斧」・「石鏃」・「円盤状石器」・「有孔玉」・「鉄片」等の遺物について、出土地点が文字で記されている。しかしこれらについては残念ながら、出土状況の図面・写真等が残されていないため詳細は不明である。当然、それぞれの出土遺物について時代・時期が混在している可能性もあると思われる。

本稿では岩倉山中腹遺跡の全ての出土遺物について報告すべきところであるが、甕棺以外の遺物については整理作業や実測作業等がこれまでに実施できていないため、今回は資料紹介を行うことができなかった。今後の課題としたい。

したがってまず、本章「２）遺物編」は、甕棺の観察・資料紹介に終始することをお断りしておきたい。

次に楡木遺跡出土甕棺について。これは熊本博物館の新館開館（1978）以来、35年以上にわたって考古常設展示室に陳列されていた甕棺1組（上棺・下棺）である。工事で掘り出されていたのを福田正文氏が発見し、熊本市へ連絡、その後熊本博物館へ収蔵・展示された。楡木遺跡と岩倉山中腹遺跡は隣接する遺跡であるため（第2図）、この機会に実測し、「付．楡木遺跡出土甕棺資料紹介」として本稿に併せて掲載することとした。

「１）遺構編」で紹介した昭和55年（1980）出土甕棺１～52号のうち、当時すでに接合作業が実施済みで組み上がった状態のまま木枠に固定・保管されていた（すなわち新たな接合作業の必要がない）甕棺21点については、平成27年度に実測・トレースの業務委託を実施した。併せて関連資料（楡木遺跡出土甕棺）１組２点についても、同様の作業を実施した。

これら計23点の甕棺については、実測図・トレース図等の成果品に加えて、詳しい観察所見も得ることができた（A）。その内容については、器種・残存状況・口径・器高・焼成などの共通項目を観察表に、それ以外の特徴を本文に示している。

一方、上記（A）の業務委託に漏れた甕棺のうち一部資料については、昭和55年の発掘調査直後に、富田紘一氏が作成された実測図がいくつか残されていた。今回これらをお借りしてトレース作業を実施し、（A）を補完する形で実測図のみを掲載した（B）。したがって、（B）には観察所見等は記されていない。

最後に、上記（A）・（B）からも漏れた資料が（C）という扱いになる。すなわち昭和55年（1980）の発掘調査で出土し、現在も博物館の収蔵庫に保管されているものの、今回諸々の制約（委託予算・頁数・熊本地震被災状況等）から、本稿に全点掲載することはできなかった。

以下では（A）の甕棺資料のみ、胎土・色調・調整・付着物その他の特徴について述べることとする。

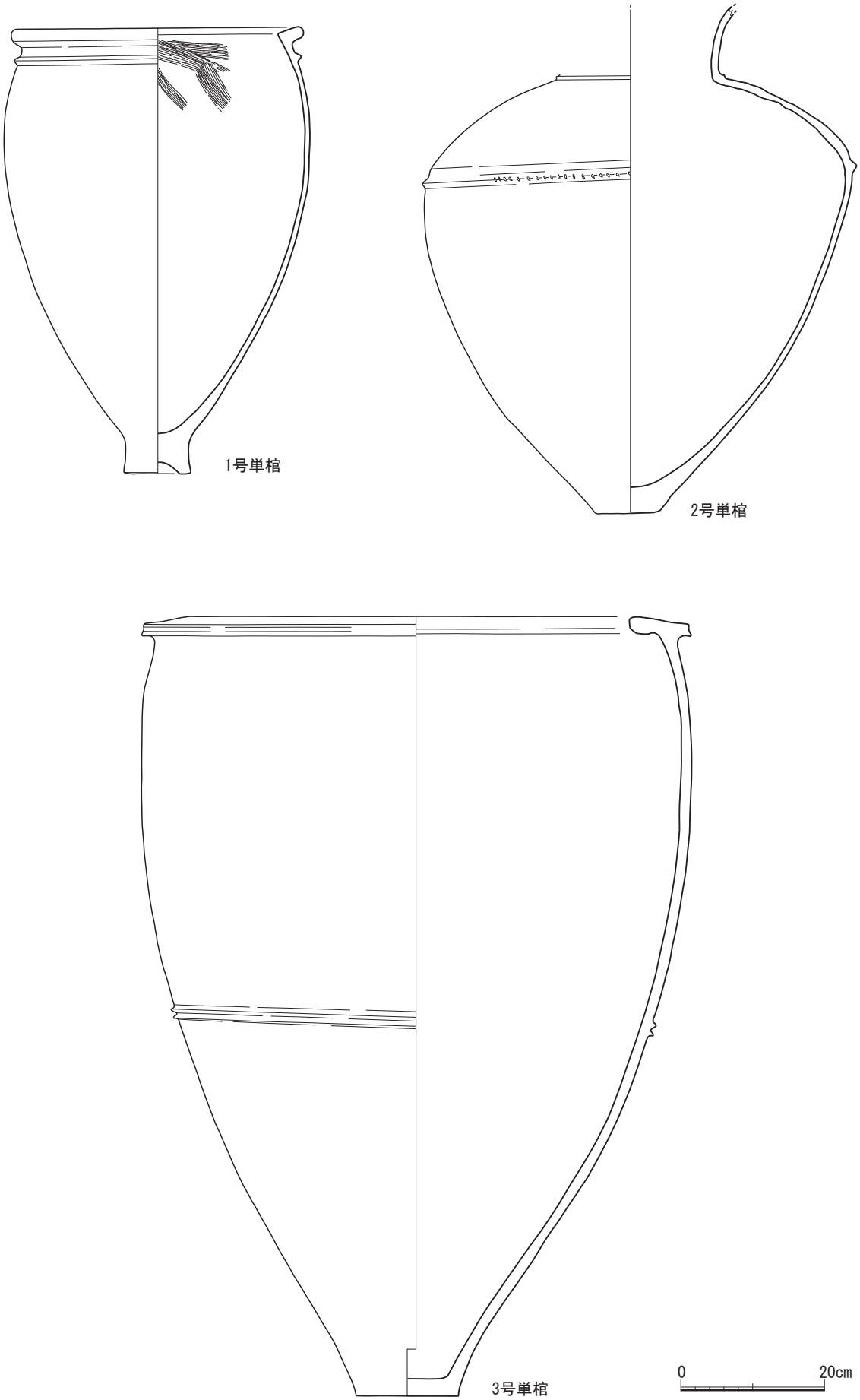
第５表　本稿での取り扱いについて

(A) 実測図・観察表 共に掲載	【岩倉山中腹遺跡】 ７号、８号(下のみ)、10号、12号、13号、15号（下のみ）、16号、17号（下のみ）、22号（下のみ）、23号、24号（下のみ）、25号、31号（下のみ）、32号（下のみ）、36号（下のみ）41号（下のみ）、42号、43号（下のみ）、50号 【楡木遺跡】１組２点（上・下）
(B) 実測図のみ掲載	【岩倉山中腹遺跡】 １号～４号、６号、８号(上のみ)、11号、15号（上のみ）、17号（上のみ）、18号、19号（下のみ）、20号、22号（上のみ）、27号（上のみ）、28号、29号、31号（上のみ）、32号（上のみ）、41号（上のみ）、43号（上のみ）、44号
(C) 実測図・観察表 共にナシ	【岩倉山中腹遺跡】 ５号、９号、14号、19号（上のみ）、21号、24号（上のみ）、26号、27号（下のみ）、30号、33号～35号、36号（上のみ）、45号～49号、51号、52号

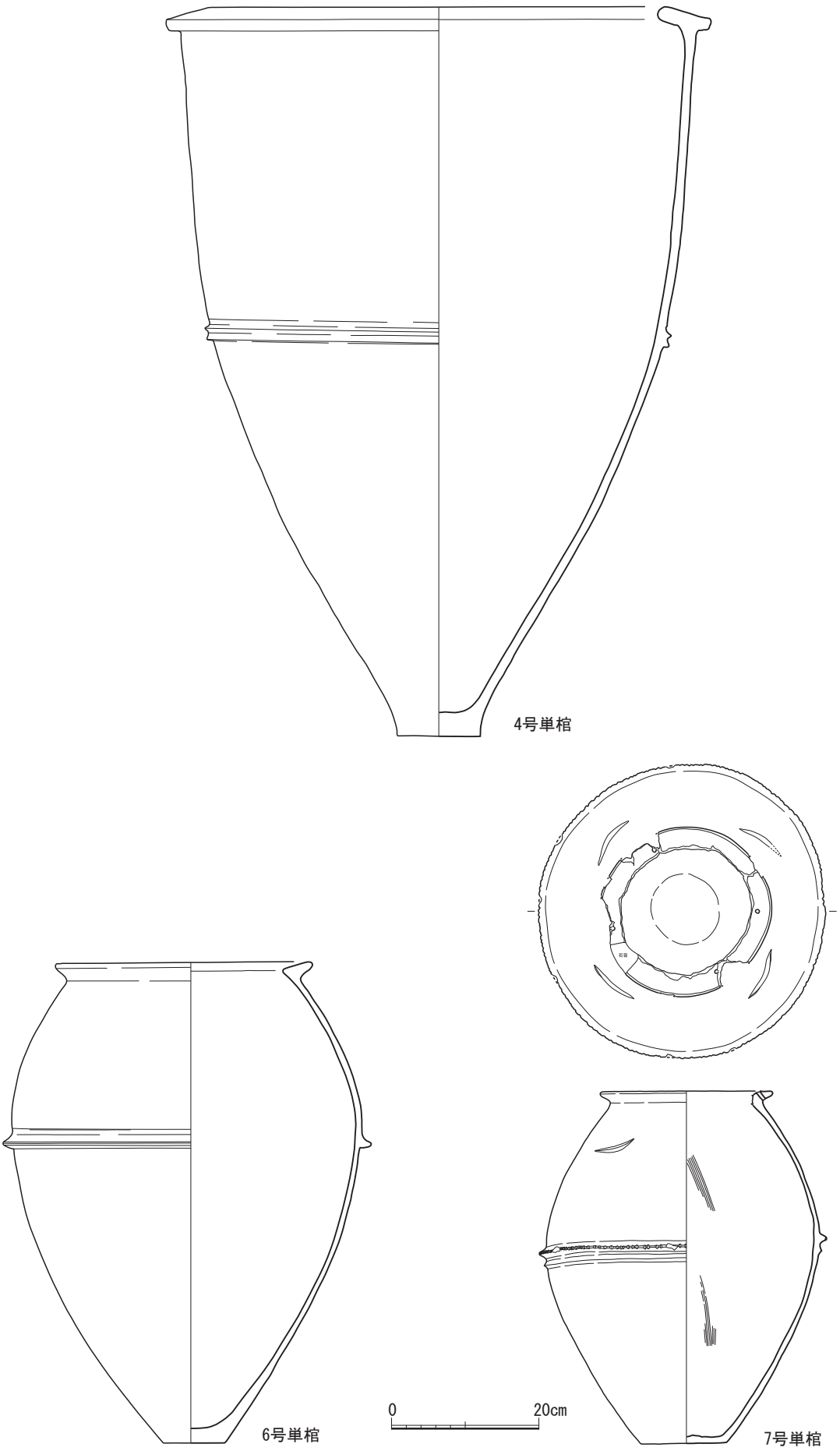
第６表　甕棺観察表

号数	遺跡名	型式	器種	残存状況	口径	器高	最大胴径	底径	焼成	グリッド
1	岩倉山中腹遺跡	単棺	甕	(B)						マ−30
2	〃	単棺	壺	(B)						へ−41
3	〃	単棺	甕	(B)						マ−32
4	〃	単棺	甕	(B)						ム−34
5	〃	複棺(上)	壺	(C)						ミ−34
	〃	複棺(下)	甕	(C)						ミ−34
6	〃	単棺(石蓋)	甕	(B)						ム−35
7	〃	単棺	壺	口縁部全周欠損	23.40	47.90	39.05	11.65	良好	ミ−35
8	〃	複棺(上)	蓋	(B)						ミ−35
	〃	複棺(下)	甕	胴部一部欠損	77.30	115.50	73.30	不明	良好	ミ−35
9	〃	複棺(上)	甕	(C)						ミ−36
	〃	複棺(下)	甕	(C)						ミ−36
10	〃	単棺	甕	胴部一部欠損	70.60	121.40	79.40	不明	良好	ミ−36
11	〃	単棺	甕	(B)						ミ−36
12	〃	複棺(上)	鉢	ほぼ完形	33.40	21.75	30.20	11.40	良	ミ−36
	〃	複棺(下)	壺	全体の3/4残存	28.80	55.90	42.80	5.60	良	ミ−36
13	〃	単棺	甕	口縁部一部欠損	66.20	100.00	64.50	不明	良好	ミ−37
14	〃	単棺	甕	(C)						ム−36
15	〃	複棺(上)	鉢	(B)						ム−36
	〃	複棺(下)	壺	胴部一部欠損	24.20	37.60	29.85	3.90	良	ム−35
16	〃	単棺	甕	口縁1/4、胴部1/8欠損	70.00	117.70	68.90	不明	良好	ム−37
17	〃	複棺(上)	甕	(B)						モ−36
	〃	複棺(下)	甕	ほぼ完形	46.20	79.80	63.40	13.80	良好	モ−36
18	〃	単棺	甕	(B)						メ−37
19	〃	複棺(上)	鉢	(C)						メ−38
	〃	複棺(下)	壺	(B)						メ−38
20	〃	単棺	甕	(B)						ム−37
21	〃	単棺	甕	(C)						ム−38
22	〃	複棺(上)	甕	(B)						ム−38
	〃	複棺(下)	甕	口縁部欠損	不明	75.70	54.50	9.50	良好	ム−38
23	〃	複棺(上)	壺	口縁部一部欠損	26.75	38.00	28.65	6.60	良好	ム−39
	〃	複棺(下)	壺	口縁部一部欠損	26.75	38.00	28.65	6.60	良好	ム−39
24	〃	複棺(上)	甕	(C)						ミ−39
	〃	複棺(下)	甕	口縁部2/3欠損	38.30	63.50	37.70	7.50	良好	ミ−39
25	〃	単棺	甕	完形	79.10	97.90	65.20	不明	良好	ミ−39
26	〃	単棺	壺	(C)						ミ−38
27	〃	複棺(上)	鉢	(B)						マ−40
	〃	複棺(下)	甕	(C)						マ−40
28	〃	複棺(上)	甕	(B)						へ−40
	〃	複棺(下)	甕	(B)						へ−40

号数	遺跡名	型式	器種	残存状況	口径	器高	最大胴径	底径	焼成	グリッド
29	岩倉山中腹遺跡	複棺(上)	蓋	(B)						フ−40
	〃	複棺(下)	甕	(B)						フ−40
30	〃	複棺(上)	甕	(C)						フ−39
	〃	複棺(下)	甕	(C)						フ−39
31	〃	複棺(上)	甕	(B)						フ−38
	〃	複棺(下)	甕	完形	43.80	72.20	44.50	8.60	良好	フ−38
32	〃	複棺(上)	蓋	(B)						フ−38
	〃	複棺(下)	甕	口縁部1/3欠損	75.95	107.20	73.70	不明	良好	フ−38
33	〃	単棺	甕	(C)						ヒ−38
34	〃	複棺(上)	甕	(C)						ヒ−38
	〃	複棺(下)	甕	(C)						ヒ−38
35	〃	単棺	甕	(C)						ヒ−39
36	〃	複棺(上)	不明	(C)						フ−37
	〃	複棺(下)	甕	完形	48.10	76.90	60.90	11.20	やや良	フ−37
37	〃	複棺(上)	壺	(C)						ヒ−37
	〃	複棺(下)	甕	(C)						ヒ−37
38	〃	単棺	甕	(C)						ヒ−36
39	〃	複棺(上)	鉢	(C)						ヒ−38
	〃	複棺(下)	不明	(C)						ヒ−38
40	〃	単棺	甕	(C)						ハ−34
41	〃	複棺(上)	蓋	(B)						ハ−34
	〃	複棺(下)	甕	ほぼ完形	72.00	117.00	75.00	不明	良好	ハ−34
42	〃	複棺(上)	蓋	ほぼ完形	68.70	36.80	60.00	12.90	良好	ノ−34
	〃	複棺(下)	甕	底部一部欠損	72.40	125.90	72.70	不明	良好	ノ−34
43	〃	複棺(上)	蓋	(B)						ノ−33
	〃	複棺(下)	甕	ほぼ完形	75.90	121.50	72.80	不明	良好	ノ−33
44	〃	単棺	甕	(B)						ノ−33
45	〃	単棺	甕	(C)						ネ−33
46	〃	複棺(上)	蓋	(C)						二−33
	〃	複棺(下)	甕	(C)						二−33
47	〃	単棺	甕	(C)						二−38
48	〃	単棺	甕	(C)						ヒ−26
49	〃	単棺	甕	(C)						セ−39
50	〃	単棺	壺	全体の3/4残存	32.00	64.65	46.00	5.80	良好	ス−37
51	〃	単棺	甕	(C)						ツ−48
52	〃	単棺	甕	(C)						ツ−48
−	楡木遺跡	複棺(上)	蓋	ほぼ完形	75.50	33.00	67.00	13.10	良好	工事中
	〃	複棺(下)	甕	ほぼ完形	84.95	117.30	77.40	14.80	良	工事中

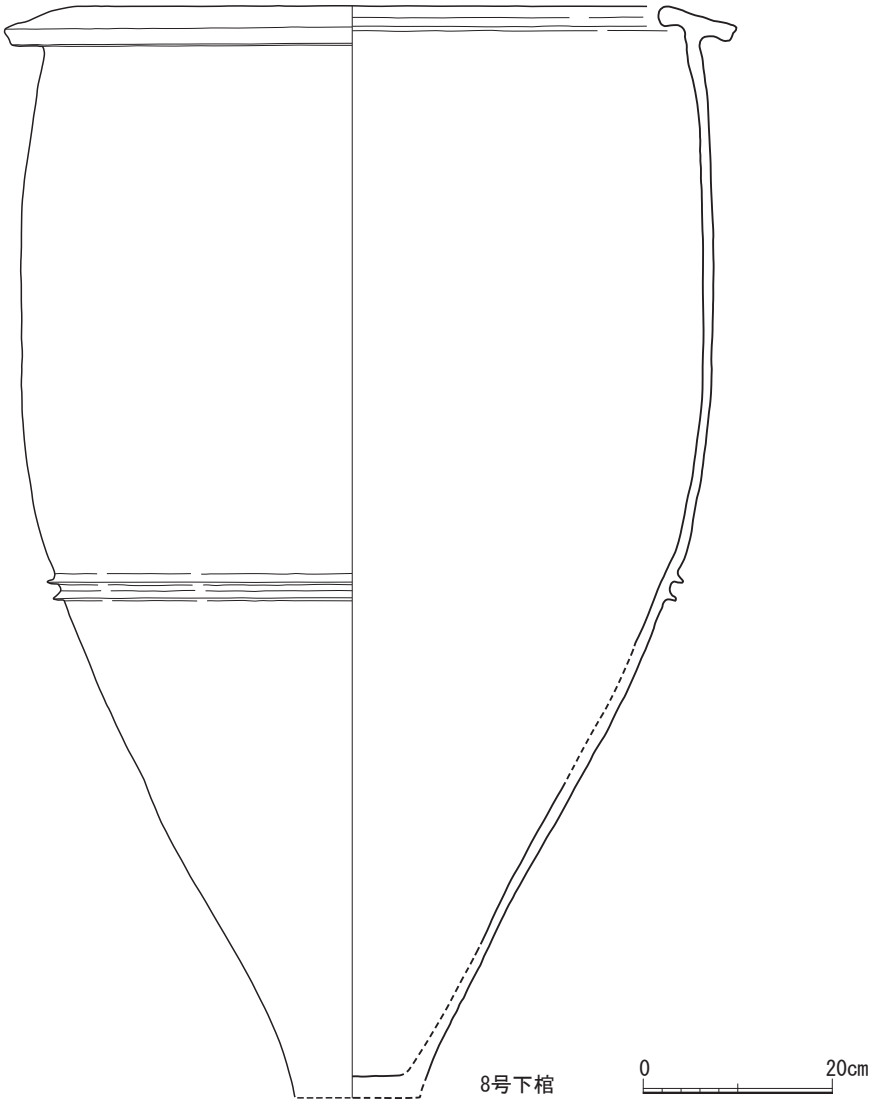


第28図　甕棺実測図１（S＝１／８）※１・２・３号は第５表（B）S55富田紘一氏実測・H27トレース分



第29図　甕棺実測図２（S= １/８）

※４・６号は第４表（B）S55富田紘一氏実測・H27トレース分、７号は第５表（A）H27実測・トレース分



第30図　甕棺実測図３（S＝１／８）※８号下棺は第５表（A）H27実測・トレース分

【７号単棺】

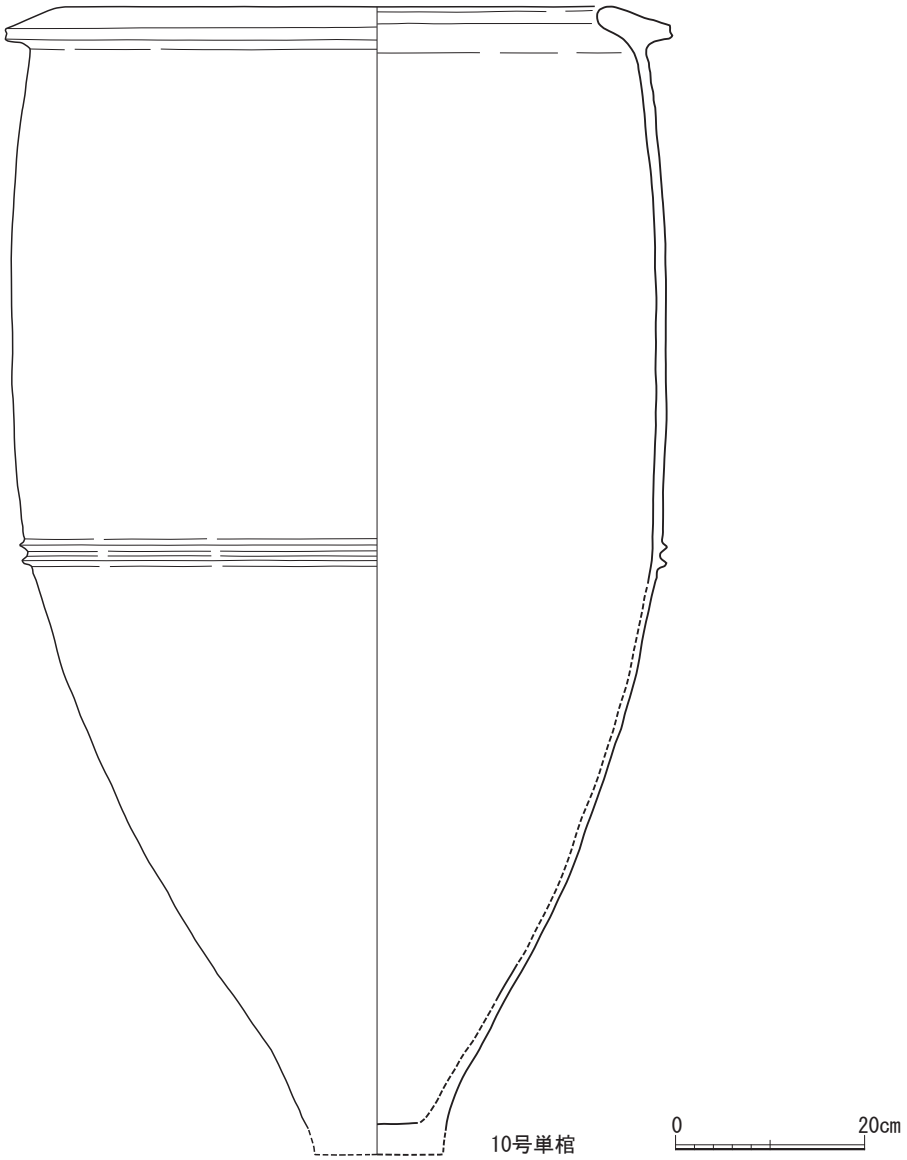
黒髪式の壺である。口縁部は全周欠損しており、石蓋使用時に打ち欠いた可能性がある。口縁部には４ヶ所の穿孔があり、焼成前に上から下へ穿孔したようである。胴部上位には「三日月形」の文様４つがあるがこれは本来、鉤形を表したものと考えられる。胴部の最大径付近には、１条の刻み目突帯と１条の突帯が見られる。外面に黒斑がある。器面が磨耗しているが、外面調整はミガキ、内面調整はハケ目後ナデが施されている。胎土は、長石・石英・雲母・砂粒・小石を多く含む。色調は、外面が橙（7.5YR 7/ 8）、内面も橙（7.5YR 7/ 8）である。

【８号下棺】

須玖式の甕である。胴部に２条の突帯がある。外面に黒斑がある。内面口縁下から外面にかけて、黒色の付着物が見られる。外面調整は胴部上位がナデ、胴部下位がハケ目後ナデ、内面調整はナデ。胎土は長石・石英・雲母・砂粒・小石を含む。色調は外面が赤橙（10R 6/ 8）、内面が橙（2.5YR 7/ 8）である。

【10号単棺】

須玖式の甕である。胴部に２条の突帯がある。内面口縁部下から外面にかけて、黒色の付着物が見られ、黒色の顔料を塗布した可能性もある。器面が磨耗しているが、外面調整はハケ目後ナデ、内面調整はナデが施されている。胎土は長石・石英・雲母・砂粒・小石を含む。色調は外面が橙（５YR 6/ 6・6/ 8）、内面も橙（５YR 6/ 6・6/ 8）である。



第31図　甕棺実測図４（S＝１/８）※10号は第５表（A）H27実測・トレース分

【12号上棺】

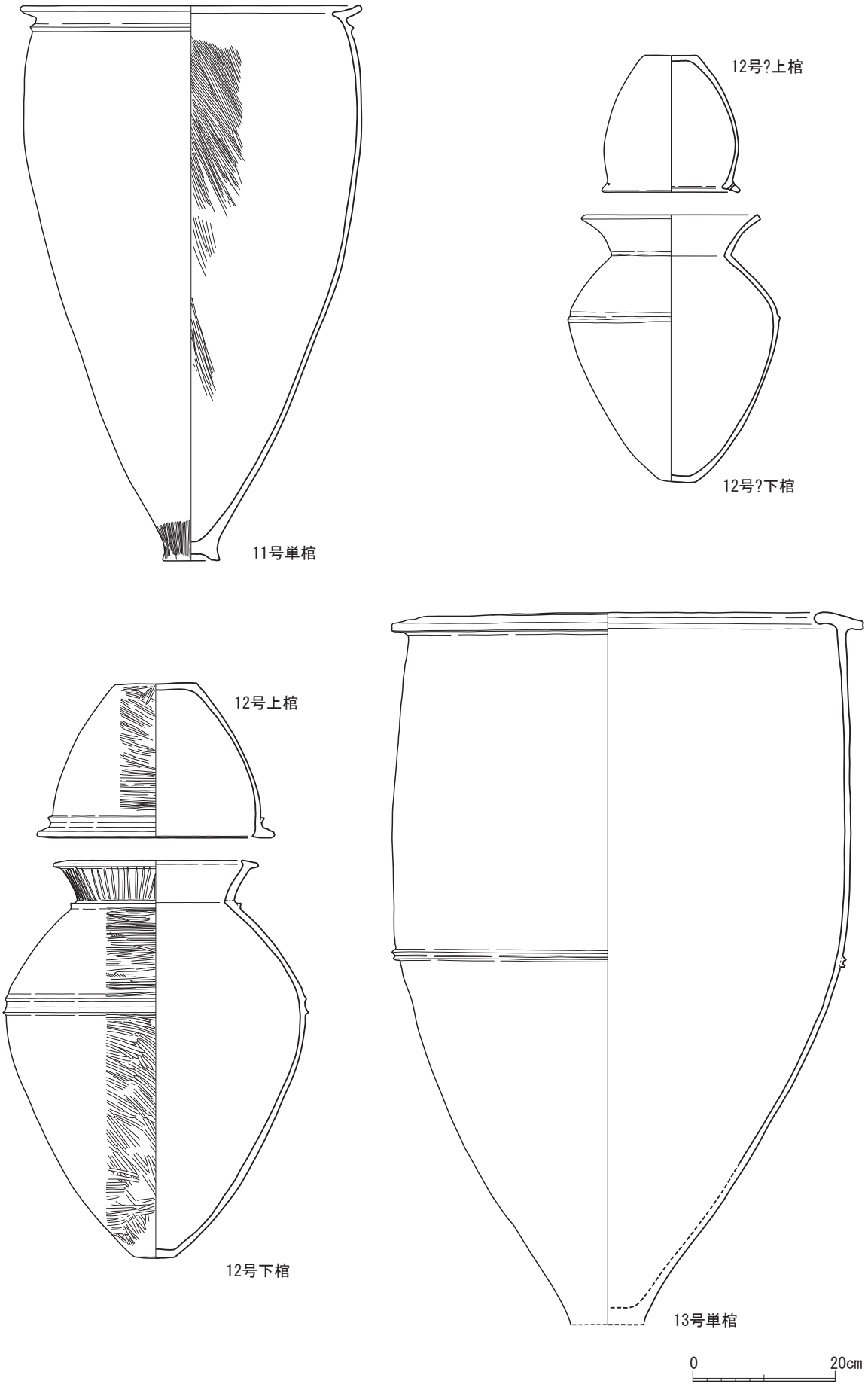
鉢である。口縁部上位に１条の突帯がある。外面に黒斑が見られる。外面調整は口縁部がナデ、胴部がミガキ、底部はナデ、内面調整はナデが施されている。胎土は長石・石英・雲母・赤褐色粒・砂粒を含む。色調は外面がにぶい黄橙（10YR 7/ 4）、内面も黄橙（10YR 7/ 4）である。

【12号下棺】

黒髪式の壺である。口縁部下位に１条の突帯、胴部に２条の突帯がある。外面には黒斑も見られる。外面調整は口縁部に暗文が施され、胴部はハケ目後ミガキ、底部はミガキが、内面調整はナデが施されている。胎土は長石・石英・角閃石・雲母・砂粒を含む。色調は外面が浅黄（2.5YR 7/ 3）・にぶい黄橙（10YR 7/ 4）、内面も浅黄（2.5YR 7/ 3）・にぶい黄橙（10YR 7/ 4）である。

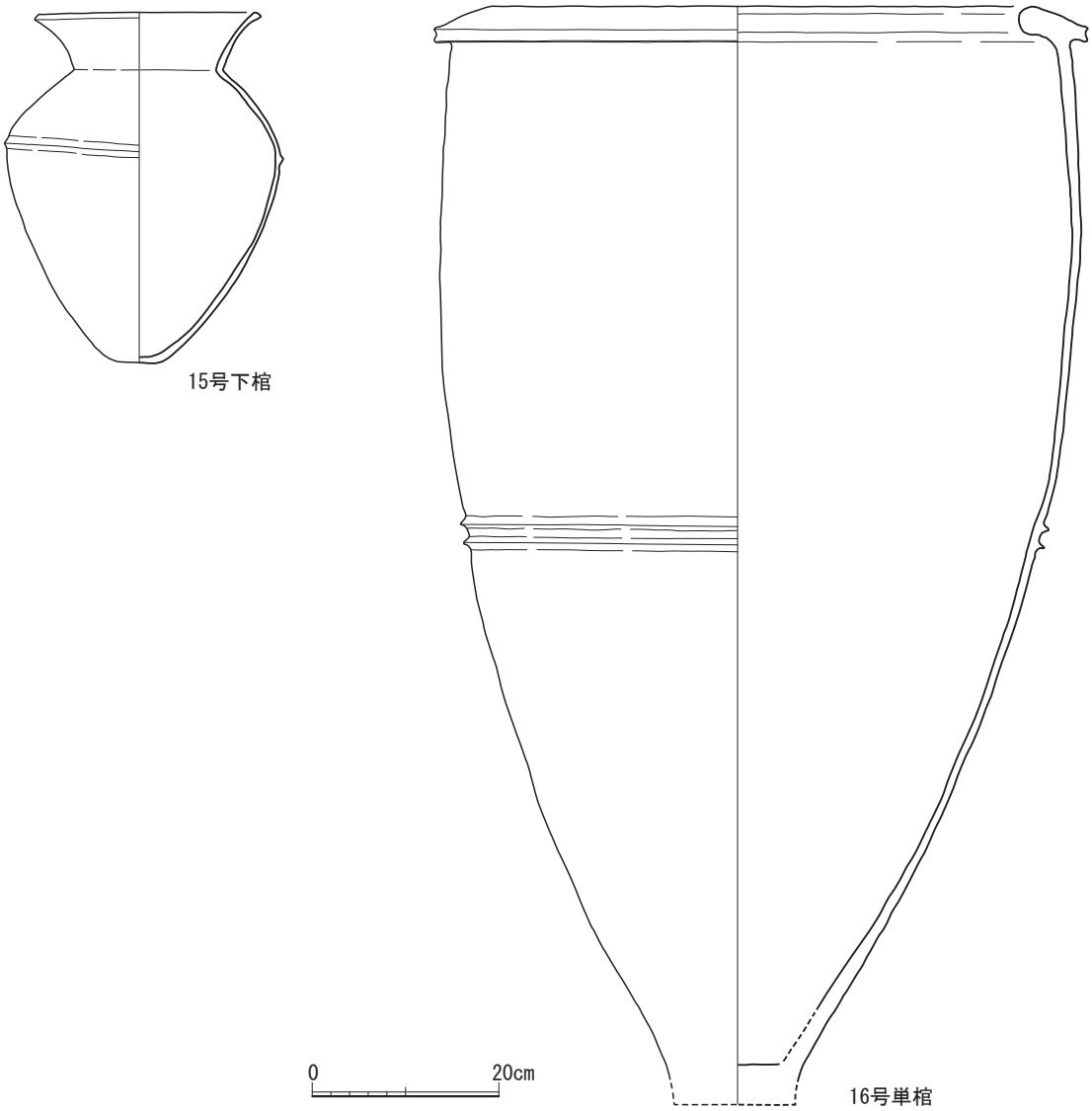
【13号単棺】

須玖式の甕である。胴部に２条の突帯がある。口縁部内面～外面にかけて黒色の付着物が見られ、黒色顔料を塗布した可能性もある。また内外面に黒斑がある。外面調整は（器面が磨耗しているが）ハケ目後ナデと見られる。内面調整はナデが施されている。胎土は、長石・石英・角閃石・雲母・赤褐色粒・砂粒・石を含む。色調は外面が橙（7.5YR 7/ 6、7.5YR 7/ 8）、内面が明黄褐褐色（10YR 7/ 6）である。



第32図　甕棺実測図５（S= １/８）

※11号は第５表（B）S55富田紘一氏実測・H27トレース分、12号？は番号照合不可、12・13号は第５表（A）H27実測・トレース分



第33図　甕棺実測図６（S＝１/８）※15号下棺・16号は第５表（A）H27実測・トレース分

【15号下棺】

壺である。胴部は一部打ち欠きが見られる。胴部には１条の突帯がある。外面は磨耗が激しく器面調整は不明である。底部にススの付着が見られる。内面調整はナデが施されている。胎土は長石・石英・雲母・赤褐色粒・砂粒を含む。色調は外面が橙（５YR７/８・６/８)、内面が橙（５YR６/８・６/６）である。

【16号単棺】

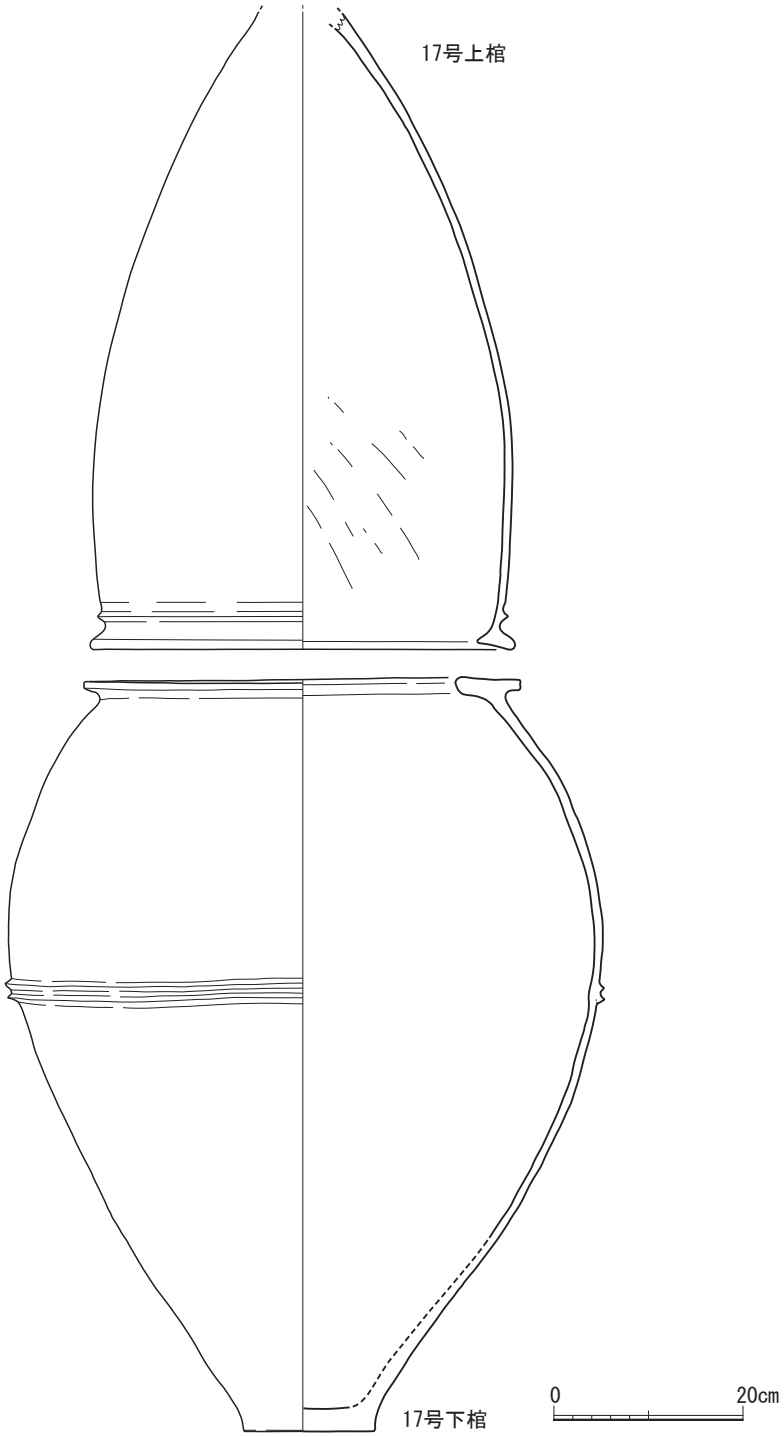
須玖式の甕である。胴部に２条の突帯がある。外面に黒色の付着物が見られる。黒色の顔料を塗布した可能性もある。器面が磨耗しているが、外面調整はハケ目後ナデ、内面調整はナデが施されている。胎土は長石・石英・雲母・砂粒・石を含む。色調は外面が橙（５YR６/６)、内面も橙（５YR６/６）である。

【17号下棺】

須玖式の甕である。胴部に２条の突帯がある。外面に黒斑がある。外面には黒色の付着物も見られる。胎土は、長石・石英・雲母・赤褐色粒・砂粒を含む。色調は、外面が橙（2.5YR ６/６）・にぶい橙（7.5YR ７/４)、内面が橙（2.5YR ７/６）である。

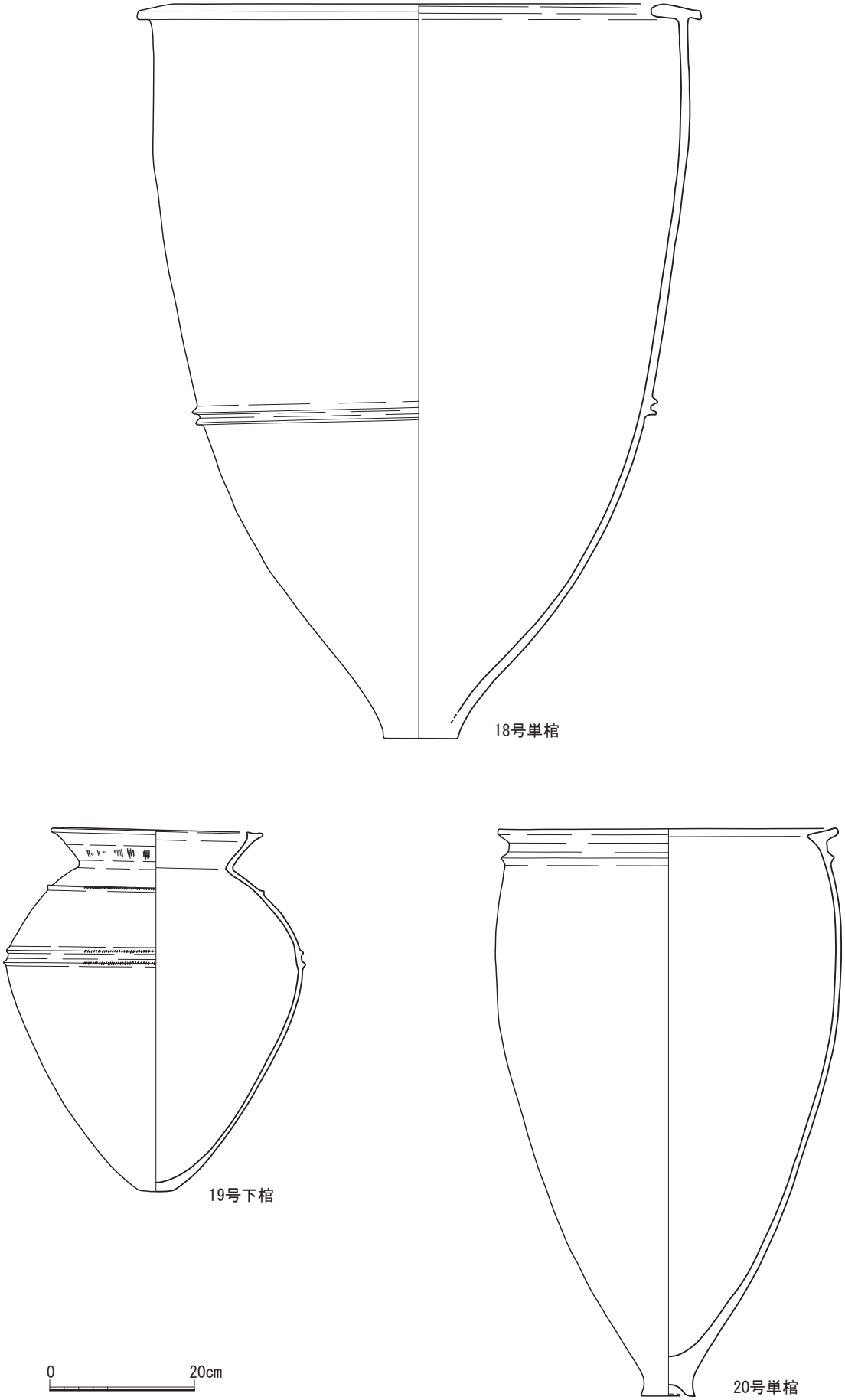
【22号下棺】

在地の中形棺の甕である。口縁部に打ち欠きが見られる。胴部に刻み目突帯がある。外面に黒色の付着物が見られる。外面調整は器面が磨耗しているがミガキと見られる。内面はハケ目後ナデが施されて

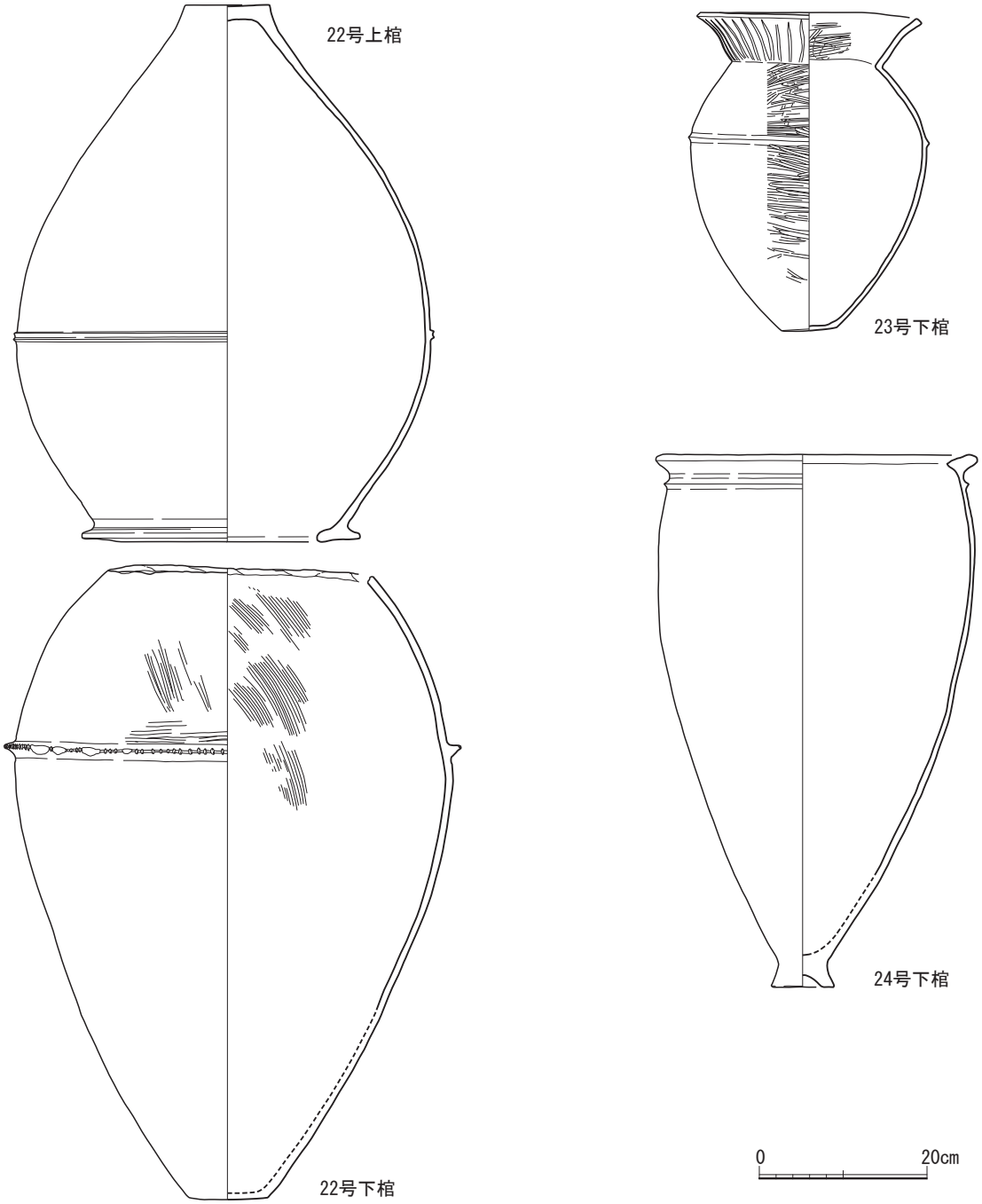


第34図　甕棺実測図７（S= １/８）

※17号上棺は第５表（B）S55富田紘一氏実測・H27トレース分、17号下棺は第５表（A）H27実測・トレース分



第35図　甕棺実測図８（S= １/ ８）※18・19号下棺・20号は第５表（B）S55富田紘一氏実測・H27トレース分

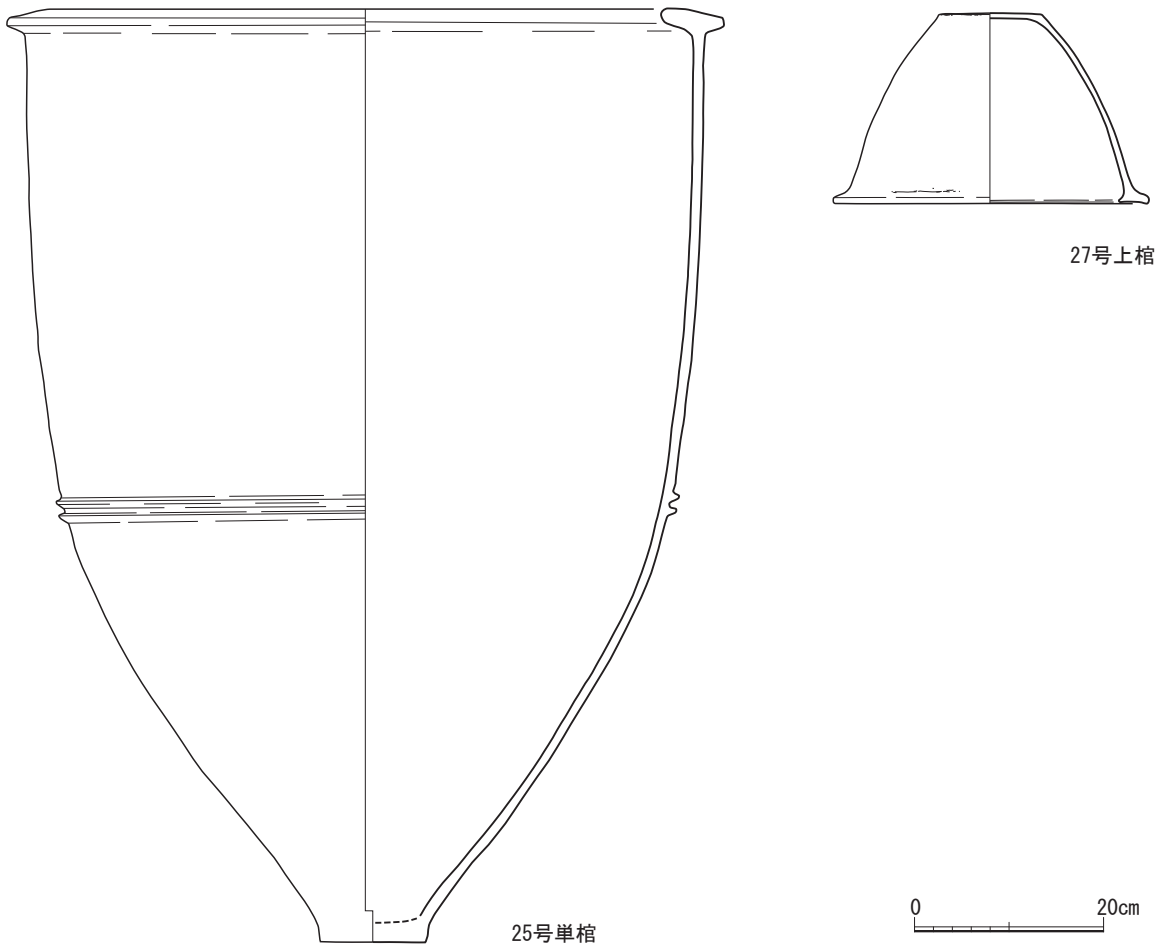


第36図　甕棺実測図９（S＝１/８）※22号上棺は第５表（B）S55富田紘一氏実測・H27トレース分
22号下棺・23号下棺・24号下棺は第５表（A）H27実測・トレース分

いる。胎土は、長石・石英・雲母・赤褐色粒・砂粒を含む。色調は、外面が橙（7.5ＹＲ７/６・６/６）、内面が橙（7.5YR ６/６）である。

【23号下棺】

黒髪式の壺である。胴部に１条の突帯がある。胴部下位は内外面ともに器面が剥落しており、被熱によるものと考えられる。外面調整は、口縁部にはヨコナデ後に暗文が施され、胴部はミガキが施されている。内面調整は、口縁部はヨコナデ後にミガキが施され、指頭痕も確認できる。胴部はナデ調整が認められる。胎土は、長石・石英・角閃石・黒色粒・赤褐色粒・砂粒を含む。色調は外面が橙（7.5YR ７/６・５YR ６/８）、内面が橙（５YR ７/８・５YR ６/８）である。



第37図　甕棺実測図10（S= 1 / 8）
※25号は第５表（A）H27実測・トレース分、27号上棺は第５表（B）S55富田紘一氏実測・H27トレース分

【24号下棺】

黒髪式の甕である。口縁部下位に１条の突帯がある。外面にはススの付着が見られる。外面調整はハケ目で部分的にナデ、内面はハケ目後ナデが施されている。胎土は、長石・石英・雲母・赤褐色粒・砂粒を含む。色調は、外面が明黄褐色（10YR 7/ 6）・橙（7.5YR 7/ 6）、内面が明黄褐色（10YR 7/ 6）である。

【25号単棺】

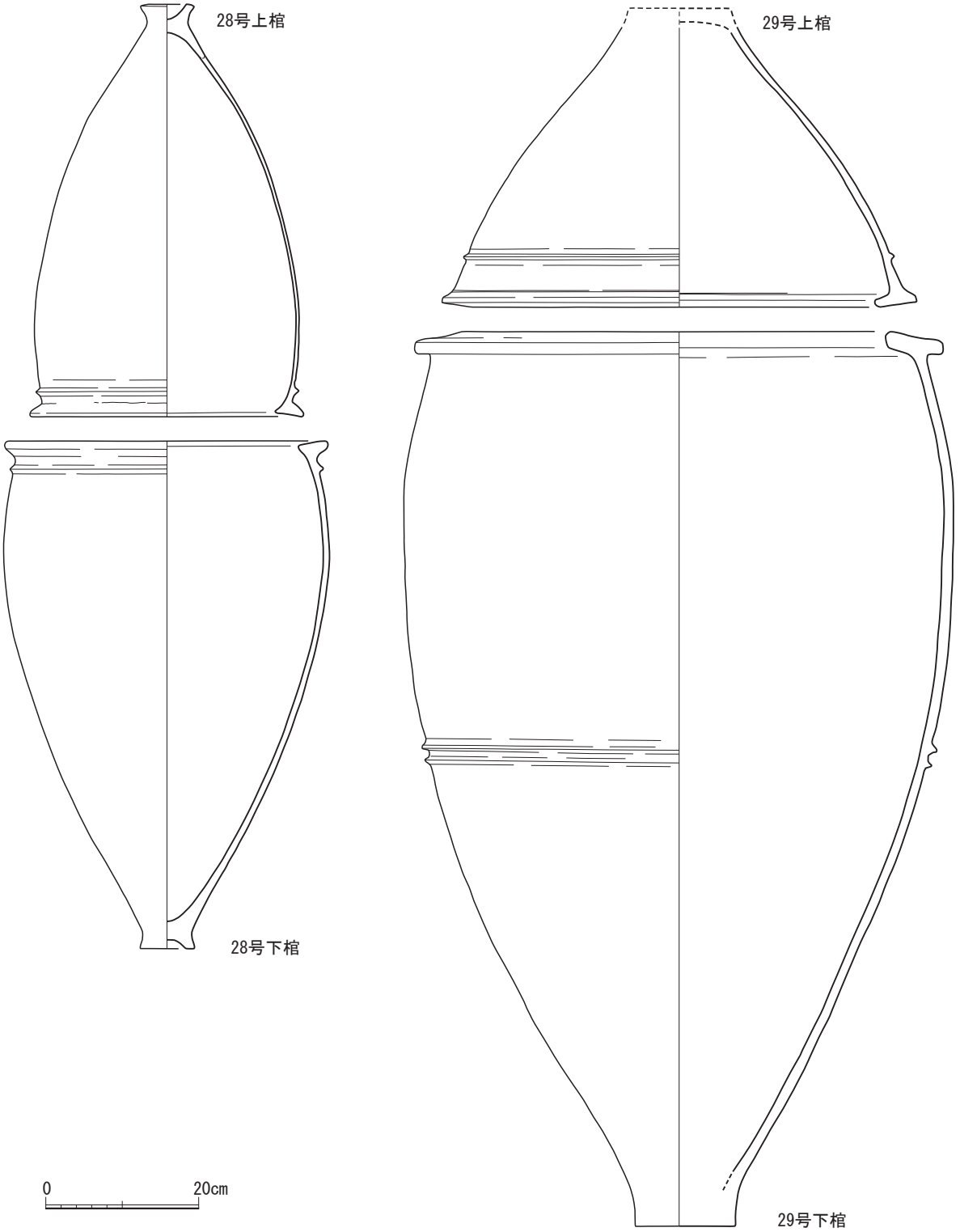
須玖式の甕である。胴部に２条の突帯がある。外面には黒斑があり、また黒色の付着物も見られる。器面調整は内外面ともにナデが施されている。胎土は、長石・石英・雲母・赤褐色粒・砂粒・小石を含む。色調は外面が浅黄橙（7.5YR 8/ 6）、内面も浅黄橙（7.5YR 8/ 6）である。

【31号下棺】

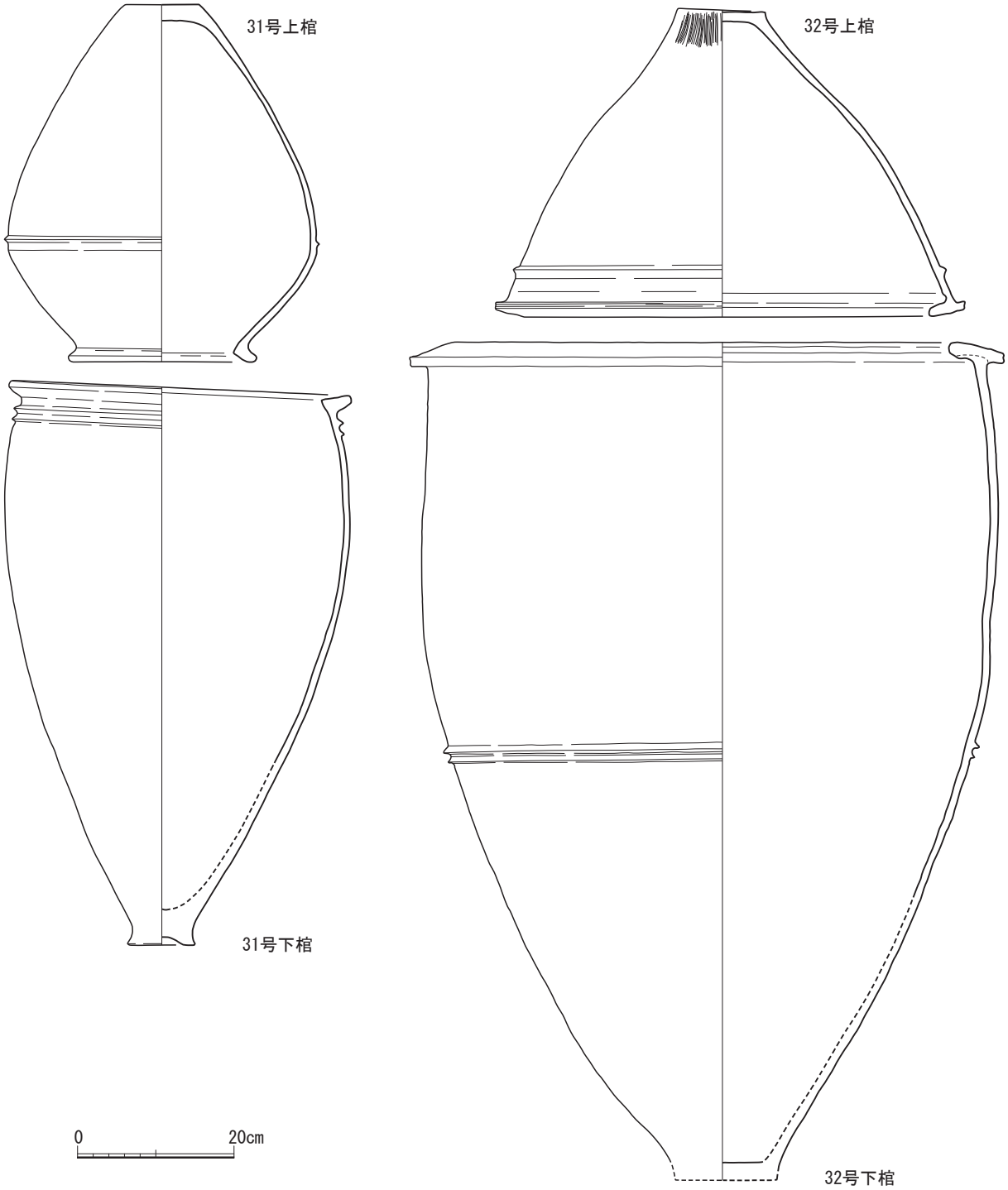
甕である。口縁部下位に２条の突帯、外面にススが付着、口縁部に黒斑が見られる。外面調整はハケ目（部分的にナデ）、内面調整はナデが施されている。胎土は、長石・石英・雲母・赤褐色粒・砂粒を含む。色調は、外面が橙（7.5YR 7/ 6）・黄橙（7.5YR 7/ 8）、内面が橙（7.5YR 7/ 6）・黄橙（7.5YR 7/ 8）である。

【32号下棺】

須玖式の甕である。胴部に２条の突帯、外面に黒斑がある。外面に黒色の付着物が見られ、外面は赤彩かと思われる。胎土は、長石・石英・雲母・赤褐色粒・砂粒・小石を含む。色調は、外面が橙（2.5YR 6/ 8、５YR 6/ 6）、内面が橙（５YR 6/ 6）である。



第38図　甕棺実測図11（S＝１／８）※28号、29号は第５表（B）S55富田紘一氏実測・H27トレース分



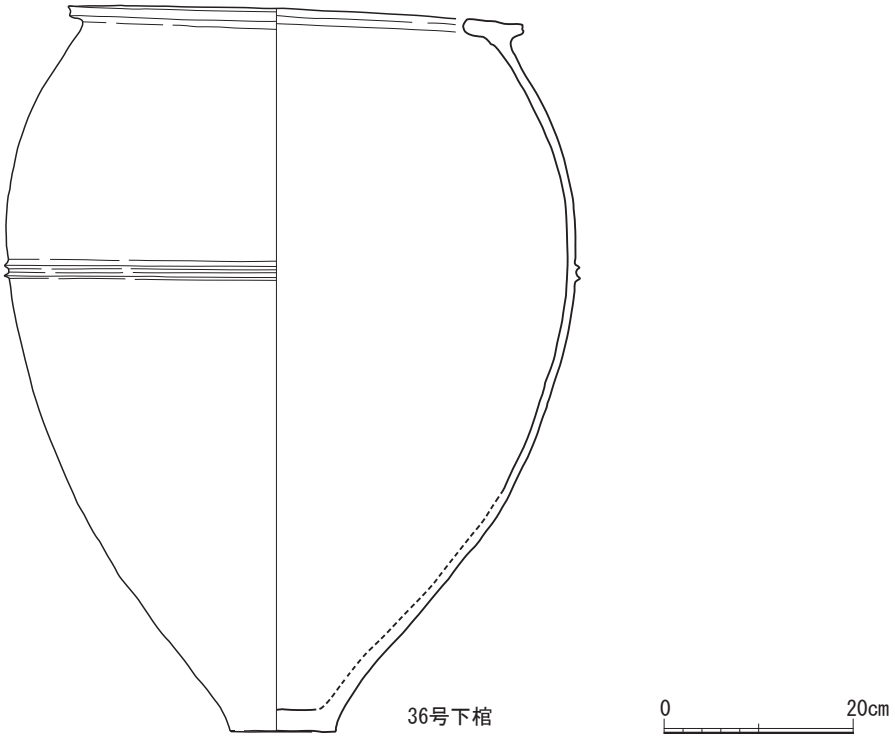
第39図　甕棺実測図12（S＝１/８）※31号上棺・32号上棺は第５表（B）S55富田紘一氏実測・H27トレース分
31号下棺・32号下棺は第５表（A）H27実測・トレース分

【36号下棺】

須玖式の甕である。胴部に２条の突帯、外面に黒斑がある。外面に黒色の付着物が見られる。外面調整はハケ後ナデ、内面調整はナデが施されている。胎土は、長石・石英・雲母・砂粒・小石を含む。色調は、外面が浅黄橙（7.5YR 7/ 6）、黄橙（7.5YR 7/ 8）、浅黄橙（5YR 7/ 8）、内面が浅黄橙（7.5YR 7/ 6）、黄橙（7.5YR 7/ 8）である。

【41号下棺】

須玖式の甕である。胴部に２条の突帯がある。外面に黒色の付着物が施されており、黒色の顔料が塗布された可能性もある。器面が磨耗しているが、外



第40図　甕棺実測図13（S＝１/８）※36号下棺は第５表（A）H27実測・トレース分

面調整はハケ目後ナデ、内面調整はナデと見られる。胎土は、長石・石英・雲母を含む。砂粒・小石を多く含む。色調は、外面が橙（7.5YR 7/ 6・5YR 7/ 8）、内面も橙（5YR 7/ 8）である。

【42号上棺】

蓋である。口縁部上位に１条の突帯がある。外面に黒斑がある。口縁部に黒色の付着物がある。外面調整は口縁部がヨコナデ、胴部がハケ目後ナデ、底部がナデ、内面調整は全てナデが施されている。胎土は、長石・石英・雲母・砂粒を含む。色調は、外面が橙（2.5YR 6/ 8）・黄橙（7.5YR 7/ 8）、内面が橙（2.5YR 6/ 8）である。

【42号下棺】

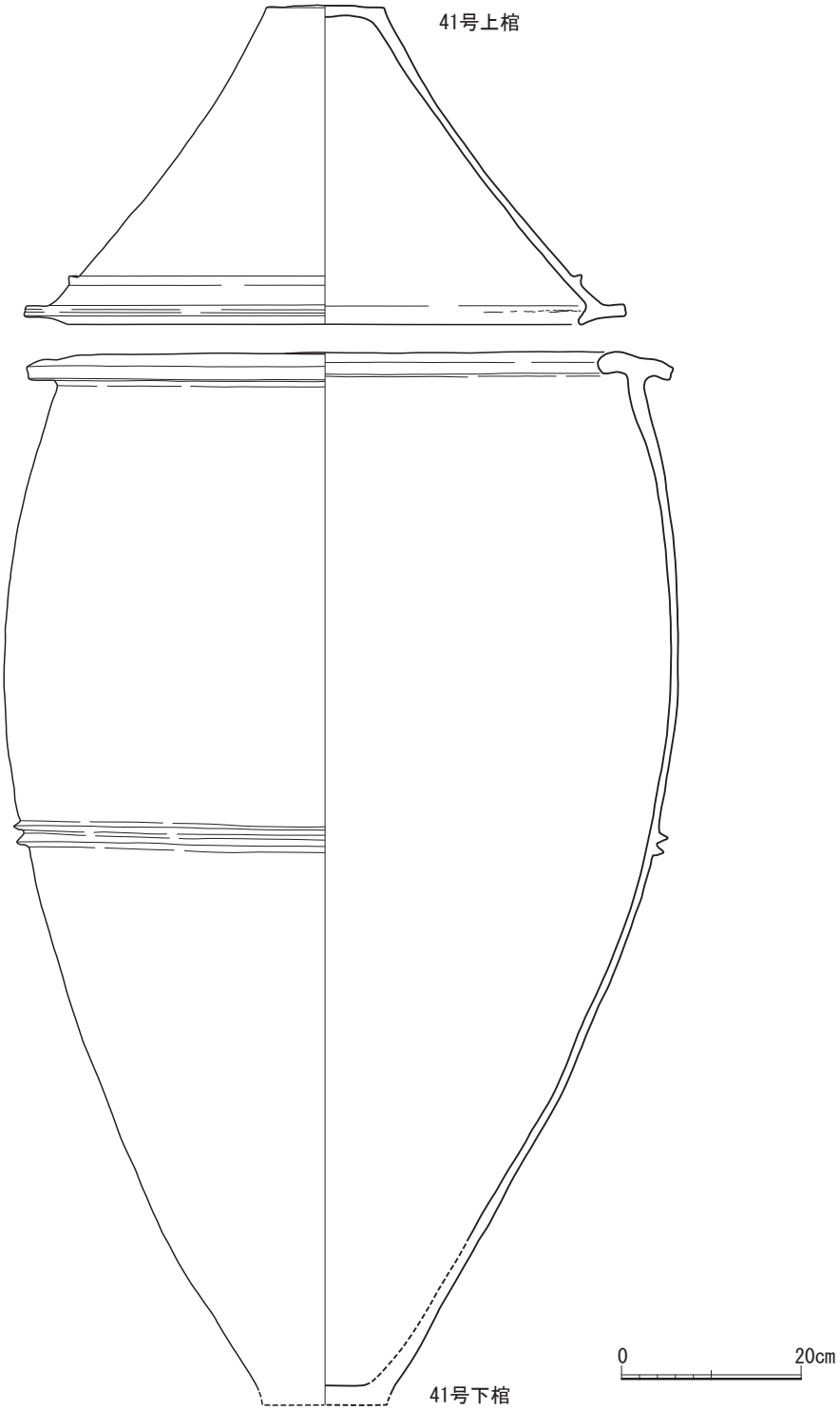
須玖式の甕である。口縁下位に１条の突帯、胴部に２条の突帯がある。外面に黒色の付着物がある。器面調整は器面が磨耗しているが、内外面ともにナデと見られる。胎土は、長石・石英・雲母・砂粒・小石を含む。色調は、外面が橙（5YR 6/ 8）、内面も橙（5YR 6/ 8）である。

【43号下棺】

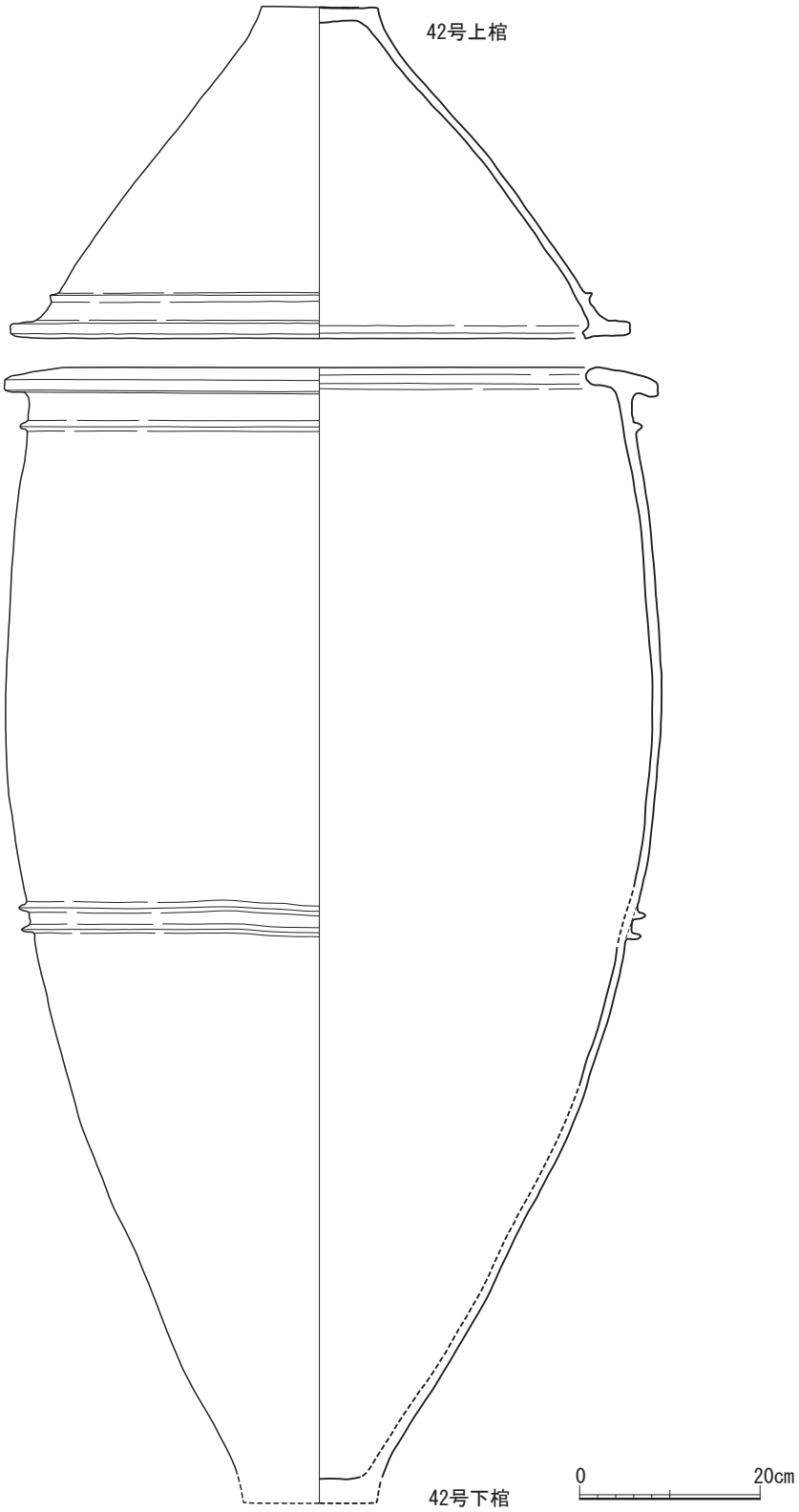
須玖式の甕である。口縁下に１条の突帯、胴部に２条の突帯がある。内面口縁下から外面に黒色の付着物が見られる。また内外面に黒斑も見られる。外面調整は器面が磨耗しているが、口縁部から胴部上位がナデ、胴部下位がハケ目後ナデ、内面調整はナデが施されている。胎土は、長石・石英・角閃石・雲母・赤褐色粒・砂粒・小石を含む。色調は、外面が明黄褐色（10YR 7/ 6）・橙（7.5YR 7/ 6）、内面が黄橙（7.5YR 7/ 8）である。

【50号単棺】

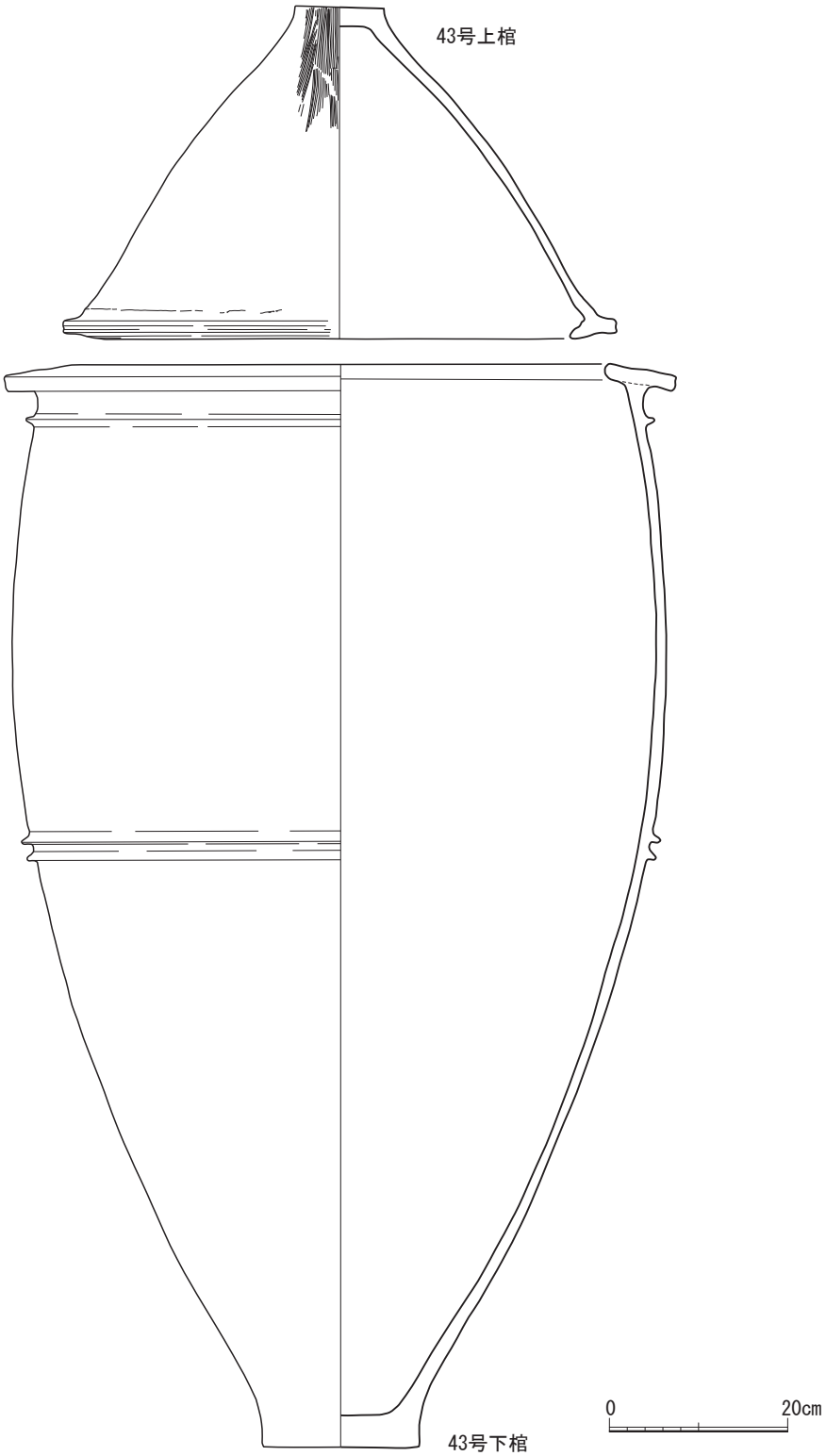
黒髪式の壺である。頸部に１条の突帯、胴部に２条の突帯がある。外面には黒斑が見られる。外面調整は口縁部がハケ目、胴部はミガキ、内面調整は口縁部がミガキ、胴部上位が指頭痕、胴部下位がナデが施されている。胎土は、長石・石英・雲母・赤褐色粒・砂粒を含む。色調は、外面が橙（7.5YR 6/ 6）、内面が橙（7.5YR 7/ 6）である。



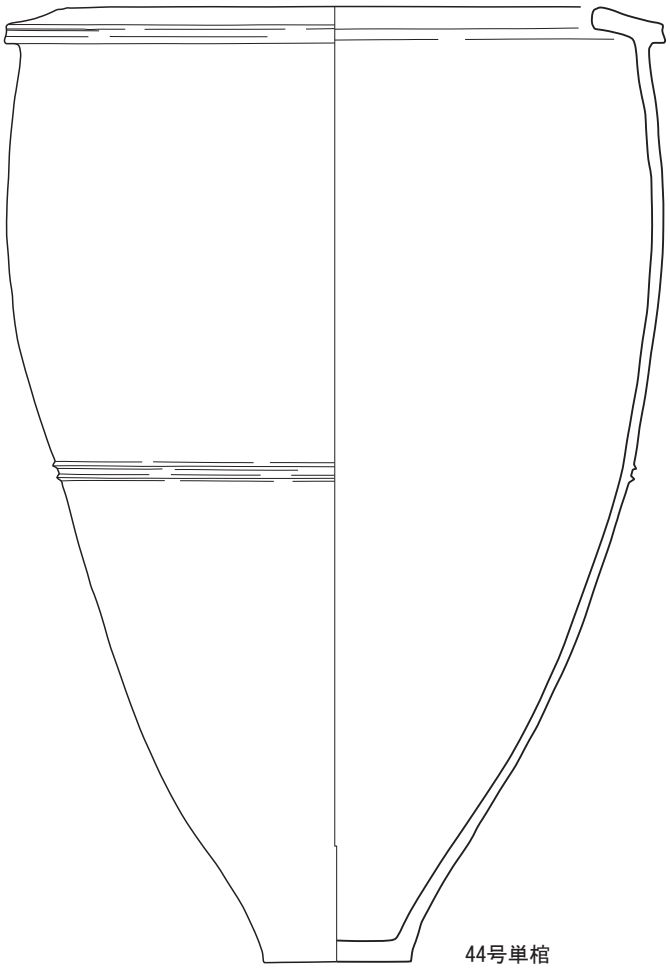
第41図　甕棺実測図14（S＝１／８）※41号上棺は第５表（B）S55富田紘一氏実測・H27トレース分
41号下棺は第５表（A）H27実測・トレース分

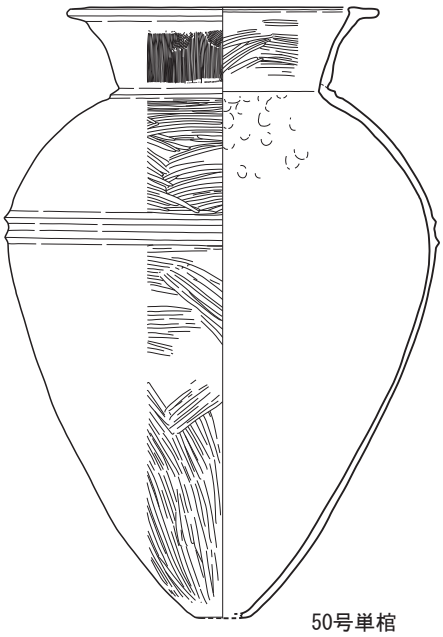


第42図　甕棺実測図15（S= 1／8）※42号上・下棺は第5表（A）H27実測・トレース分



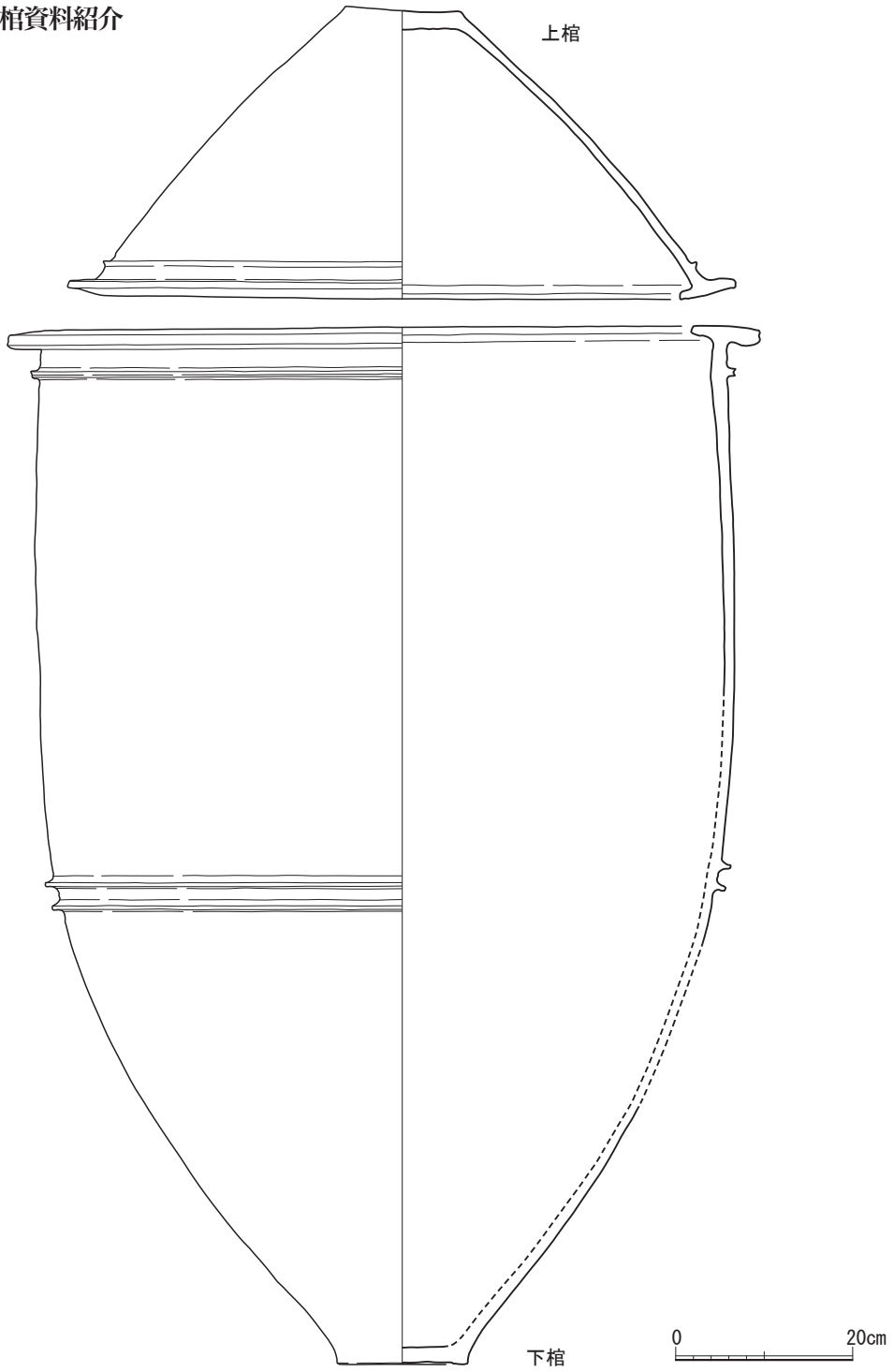
第43図　甕棺実測図16（S＝１／８）※43号上棺は第５表（B）S55富田紘一氏実測・H27トレース分
43号下棺は第５表（A）H27実測・トレース分





0　20cm

第44図　甕棺実測図17（S＝１／８）※44号は第５表（B）S55富田紘一氏実測・H27トレース分
50号は第５表（A）H27実測・トレース分



第45図　甕棺実測図18（S＝１/８）※楡木遺跡上・下棺は第５表（A）H27実測・トレース分

【楡木遺跡：上棺】

蓋である。口縁部に１条の突帯がある。外面調整は口縁部がヨコナデ、胴部がハケ目後ナデ、底部がナデ、内面調整もそれぞれ同様である。胎土は長石・石英・雲母・砂粒を含む。色調は、外面がにぶい黄橙（10YR ７/４）、内面がにぶい黄橙（10YR ６/４）である。

【楡木遺跡：下棺】

甕である。口縁下に１条の突帯、胴部に２条の突帯がある。外面に黒斑が見られる。また外面には黒色の付着物があり、黒色の顔料が塗布された可能性もある。外面調整は口縁部から胴部上位にかけてナ

デ、胴部下位はハケ目後ナデ、内面調整はナデが施されている。胎土は、長石・石英・雲母・砂粒・小石を含む。色調は、外面がにぶい黄橙（10YR 7/4）、内面もにぶい黄橙（10YR 7/4）である。

第9章　考察

前章までの事実報告を踏まえて、岩倉山中腹遺跡の特徴を以下に整理し、可能な範囲で考察を行ってみたい。

まず本遺跡は「岩倉山中腹遺跡」の名称のとおり、丘陵上に立地している。標高は62～67mと高いが、眼下に見下ろす平地の標高が42m前後であるため、その比高差は20m程度である。楡木遺跡や庵ノ前遺跡とは谷を挟んで対峙しており、いずれも同時期の甕棺墓が発見されていることから、一帯の丘陵上には墓域が点在していた様子がうかがえる。但し、同時期の集落（居住域）はこの一帯では特定されていない。

そもそも熊本市内において、弥生時代の甕棺墓と居住域が一緒に検出されているのは白藤遺跡群（南区）・八ノ坪遺跡（南区）などの自然堤防上や、神水遺跡（中央区）・宮地遺跡群（南区）などの台地上の遺跡である。検出された甕棺の数と存続時期は、白藤遺跡群が300基以上で中期前半～後半、神水遺跡が150基以上で中期前半～後半と、大規模な集団墓地かつ存続期間が長いのが特徴である。

これに対して、岩倉山中腹遺跡で検出された甕棺の数は52基である。比較的まとまった数量が発見されているが、上記２遺跡の数量・規模には及ばない。またその時期も中期半ばの「須玖式：Ⅲａ」に限られており、長期間営まれた拠点集落の墓ではないようだ。中期半ばと言えば、須玖式の成人用大形甕棺が一番隆盛し拡がる時期である。すなわち、庵ノ前遺跡をはじめ、新南部遺跡・梅ノ木遺跡なども岩倉山中腹遺跡と同様、中期半ばに短期間形成された墓域と言える。

中期半ば以降は、熊本では例えば中期後半の木棺墓・土壙墓（南阿蘇村及び高森町：幅・津留遺跡）や、後期の土壙墓（熊本市北区：ヲスギ遺跡）等、甕棺墓以外の形態が多く発見されている。したがって、この時期に北部九州で拡がりを見せる「立岩（古）式：Ⅲｂ」「立岩（新）式：Ⅲｃ」といった甕棺墓は、熊本においてはほとんど見られない。

また須玖式甕棺（大形棺）の分布南限は宮地遺跡群（熊本市南区）及び境目遺跡（宇土市）であり、県南部には見られない。北部九州からの影響は当然のことであるが、その分布圏を広く捉えると、佐賀～熊本の有明海沿岸一帯に拡がる大きなネットワークと見ることもできる。

岩倉山中腹遺跡の甕棺については、さらに細かく時期差を検討してみたい。いわゆる「黒髪式」土器については、壺の肩の張りが強いものが古いとされる。また口縁部・底部断面が厚い製品が古く、薄い製品が新しい傾向にある。これらを整理すると、中期半ばでもおおよそ以下の３時期に分けることができる。

１）中期半ば（Ⅲａ）黒髪式（やや古い）…１・２号等

２）中期半ば（Ⅲａ）須玖式大形棺…18・25・42号等

３）中期半ば（Ⅲａ）黒髪式（やや新しい）…50号等

なお７号甕棺は黒髪式土器の中でも、穿孔４ヶ所かつ三日月文（鉤文）４ヶ所が見られる特徴的な土器であるが、梅ノ木遺跡でも中期後半の新しいタイプで同様の類例が見られる。こうした穿孔は、紐などを通して運ぶために開けられたものと考えられる。

次に甕棺埋設の際の「墓壙形状」「傾斜」「二次壙の有無」等について。まず「墓壙形状」については「隅丸方形」「楕円形」「卵形」など当時の所見が残されているが、岩倉山中腹遺跡の場合、甕棺検出時には既に掘込の上端が大きく削平された状態であったと考えられるため、本来の形状・平面プランを留めていたとは限らず、注意が必要である。

ちなみに前述の白藤遺跡群や神水遺跡などの大規模な集団墓地では、墓壙のサイズも大きい。さらに神水遺跡では、複数の甕棺がグループを形成し、溝で区画されたり、成人用甕棺を中心に小児甕棺が周囲に配置された例もある。岩倉山中腹遺跡の場合は土壙も小さく、甕棺墓の区画・配置等も認められな

い。

次に「傾斜」と「二次壙の有無」について。当然ながら両者は相関関係にある。すなわち、ほぼ水平に横たえて複棺（合口甕棺）を埋設する場合は、「二次壙」は不要である。一方で大きく「傾斜」させて甕棺を埋設する際は、下棺設置→遺体埋葬→上棺を合口にして設置…という工程から、高低差の軽減や作業スペースの関係上、「二次壙」が必要となる。

次に９号甕棺墓の標石の可能性について。類例としては、近年の調査例から、新南部遺跡群11次調査の検出例がある。岩倉山中腹遺跡（北区）から立田山を隔てて約３km 南南東へ離れた新南部遺跡群（東区）では、県文化課が白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴い実施した発掘調査（註９）において、墓の地表に無数の石を並べた標石（墓の目印）を検出し、注目された。県文化課によると、出土したのは甕棺墓７基と木棺墓３基で、うち２基の甕棺墓には、標石とみられる石群が残る。複数の標石を並べた甕棺墓は全国でも珍しいという。石を円状や不規則に並べた標石とみられる遺構も複数見つかっている。

次に甕棺墓の副葬品について。岩倉山中腹遺跡の甕棺墓からは、副葬品は発見されていない。庵ノ前遺跡や前述の白藤遺跡群・神水遺跡なども同様で、熊本の甕棺墓からは基本的に副葬品は発見されない。北部九州の同時期の須玖式甕棺から青銅器（細～中細型銅剣）等の副葬品が出土する状況とは対照的である。

最後に人骨について。岩倉山中腹遺跡の発掘調査で人骨は検出されていない（遺構検出図にも記載がなく、収蔵もされていない）。ちなみに庵ノ前遺跡では合計５体の成人骨（男性１・女性２・不明２）が検出されている。このうち男性（10号人骨）の推定身長が161.49cm など、熊本の弥生人男性は北部九州人ほど高身長ではないが、西北九州人ほど低身長ではない等の所見が得られている（註10）。

第10章　まとめ

前章での考察結果から、本稿で明らかにできた成果をまとめると、以下のとおりとなる。

１）岩倉山中腹遺跡は弥生時代中期半ばに丘陵上に営まれた墓域である。居住域は特定されていない。
２）台地上に形成された大規模な集団墓地（白藤遺跡群・神水遺跡など）に比べ、遺跡の存続期間は短い。
３）52基という甕棺の検出数は比較的多い方だが、大規模な集団墓地（300基・150基）には及ばない。
４）岩倉山中腹遺跡の場合は土壙のサイズも小さく、甕棺墓のグループを示す区画・配置も認められないが、須玖式甕棺が数基集中する箇所は見られる。また甕棺の方位は東西方向が多い。
５）９号甕棺の周囲の礫石５点は、標石の可能性もある。市内では近年、新南部遺跡群11次調査で甕棺墓の標石とされた検出例がある。
６）甕棺の形態・特徴から時期差を検討した結果、中期半ばの中でもおおよそ３つの時期に分類できる。
７）岩倉山中腹遺跡の甕棺墓から副葬品は発見されていない。これは熊本の他の甕棺墓と同様である。
８）岩倉山中腹遺跡からは人骨もほとんど検出されていないが、17号甕棺のみ下棺内に骨粉が残存していた。

おわりに

「岩倉山中腹遺跡」の発掘調査から36年が経過したが、この度ようやく発掘調査報告を刊行することができた。「岩倉山中腹遺跡」は、『新熊本市史考古資料編』（註11）にも掲載がなく、当館 HP 上でデータベース情報と写真が公開されているのみであった。

今回このタイミングで調査報告に至った一番の要因は、何と言っても当時の「遺構検出図」や「甕棺出土状況一覧表」（全て手書き）が熊本博物館の引越作業中に再発見されたことである。甕棺の遺構検出図については、Ａ１～Ａ２サイズ程度のトレーシングペーパーが10枚ずつ巻かれた状態で保管されていた（写真５）。52基全てのトレース図が揃っていた状況からみて、当時すでに報告書刊行間近だったのではないかと拝察される。結局なぜ刊行に至らなかったのか理由はわからないが、丁寧に実測・ト

レースされた数十枚もの図面を目の当たりにして、当時の発掘調査や整理作業に関わった人々に敬意を抱くと同時に、35年以上も未報告のまま保管されていたこれら調査成果を何とか世に出さなくてはならない責務を強く感じた。

当館ではこれまでも収蔵資料の整理作業・データベース化や館報誌上での「資料紹介」は数多くまとめてきたが、今回のような昭和時代の調査事例では発掘当時の「遺構」図面が伴う例は極めて稀であり、どうしても「遺物」だけの紹介に終始してしまうケースが多かった。本稿を「資料紹介」ではなく「調査報告」という扱いにしたのは、全点掲載ではないものの「遺構編」「遺物編」の両方が揃ったからである。

今回、当時の関係者数名にも聞き取りを行ったが、どうしても補いきれない不備な点も多い。例えば、調査日誌・野帳・ノート等の記録が残されていないために、発掘調査経緯や調査参加者などの重要な情報が欠落していること。また調査当時の作業風景や遺構検出写真も見つけ出せなかったため、一切掲載していないこと。その他、図面番号（12号）が重複しているなど甕棺実物との照合に一部支障をきたしたことや、遺構断面図レベル数値の記載が漏れていたが今となっては確認のしようがないこと、そもそも発掘調査区が広大な岩倉台団地の中でもどこにあたるのか、現在の地図（第１図）で示すことができないこと、等である。

本稿はこのように不充分な形ではあるものの、今後の調査研究の発展や埋蔵文化財保護に資するために、現段階で可能な限りの内容をまとめて報告するものである。こうした特殊な事情や注意点をご理解いただいた上で、今後広くご活用いただきたい。

【謝辞】

本稿を執筆するにあたり関係者の皆様にご協力いただきました。ご芳名を記して感謝申し上げます。

赤星雄一・今村克彦・岩崎さゆり・國武真紀子・
富田紘一・南部靖幸・濱野素文・林田和人・
福田晴男・福田正文

（五十音順・敬称略）

【註・引用文献】

１）西村健吾『空から見たくまもと　熊本県航空写真集 ‘82』ワールドジャーナル
２）濱野素文氏（岩倉台団地在住）提供による。
３）米村大2003『熊本県文化財調査報告第215集 岩倉山中腹遺跡―熊本市八景水谷2丁目17番1号所在遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書―』熊本県教育委員会
４）浜田彰久1997『庵ノ前遺跡Ⅲ－一般国道3号熊本北バイパス改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』熊本県教育委員会
５）熊本市北部地区文化財調査報告書編集委員会1971「文化財一覧」『熊本市北部地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会
６）『熊本市遺跡地図』
７）株式会社 高田屋 ホームページより
８）「くまもと新景」第1部－4（全12回シリーズ）昭和61年（1986）2月28日 熊本日日新聞夕刊
９）熊本県文化財調査報告第320集　『新南部遺跡群（10次・11次）吉原遺跡』
10）註4）に同じ
11）新熊本市史編纂委員会1996『新熊本市史編纂委員会　史料編　第１巻　考古資料』

【参考文献】

・大田幸博他1991『庵ノ前遺跡Ⅰ・Ⅱ』熊本県教育委員会
・浜田彰久1999『迫ノ上遺跡』熊本県教育委員会
・浜田彰久1999『古閑山遺跡』熊本県教育委員会
・熊本県地質図編纂委員会2008『熊本県地質図（10万分の1）および同説明書』社団法人熊本県地質調査業協会
・熊本市教育委員会1969『熊本市北部地区文化財調査報告書』
・美濃口雅朗2002『つつじヶ丘横穴群』熊本市教育委員会
・新熊本市史編纂委員会1996『新熊本市史編纂委員会　史料編　第１巻　考古資料』

発掘調査区の位置（推定）

※当時の遺構配置図（第４図）に描かれた道路のカーブなどから推定。